

平成十九年度貴重資料紹介展

天保飢饉の上田

古文書学習会「山なみ」
上田市立上田図書館

天保飢饉の上田

刊行のことば

この度、「天保飢饉の上田」と題して、上田市立上田図書館の代表的なコレクションである、「藤廬文庫」・「花月文庫」・「花春文庫」の中から当時の状況を記した資料を中心に貴重資料の紹介展を開催することとなり、それに合わせて図録『天保飢饉の上田』を刊行する運びとなりました。

天保（一八三〇年から一八四三年）は、江戸時代後期であり、飢饉や一揆の多発した時代でもありました。天保の大飢饉は江戸時代の最大規模の飢饉であったと言われています。今回の資料展は、その時代における上田の人びとの生活を知る上で大変貴重なものであると考えます。

上田市立上田図書館には、「花月文庫」のほか「藤廬文庫」「花春文庫」などの特殊コレクションを数多く収蔵、保管しています。これまでに、「嬉笑文庫お披露目展」「上田に見る元禄時代」「地域の文化人成澤寛経『百合ささめごと』の世界」「信州上田豆本の世界」そして平成一七年には「殿様の図書館」として、数々の貴重資料紹介展を開催してきました。

今回の企画展は元上田市誌編さん委員の尾崎行也氏及び氏が専任講師として指導する古文書学習会「山なみ」（会長宮島かつ子氏）によって企画・実施され、図録も刊行されました。

「山なみ」は、当館が所蔵する貴重資料を解説し、市民に提供するという活動を続けており、難解な古文書の内容を平易に読むことにより、歴史をひもとく一助となっています。

上田市立上田図書館を学習の場として、楽しみながら学習や自己研鑽を深め、成果をまとめ、社会に貢献している「山なみ」の活動は特筆すべきものです。

今回の刊行にあたり、関係者各位の御苦勞に対し、深く感謝申し上げます。

平成一九年一月一日

上田市立上田図書館長 成澤英之

目次

刊行のことば	成澤英之	1
天保飢饉期の上田	尾崎行也	3
『天保饑愁』		10
『救荒鄙論』		24
上田城下町『本陣日記』に見る天保飢饉		28
天保期上田藩における盗難		34
郷土資料に見る天変地異		38
『享保以後上田町天変地災記・秋葉及稻荷祠勧請記』		38
『信州浅間焼之事』		39
『浅間騒動記』		40
『天明三年浅間焼及騒動記』		40
『信濃ノ國浅間山大焼騒動記』		42
『信濃国大地震大満水写』		43
『信濃史談』		45
へ年表 天保期の上田		47
執筆者紹介		48

凡例

- 一、本書は、平成十九年度上田図書館貴重資料紹介展「天保飢饉の上田」に併せて作成した。
- 一、書名は、原本の題箋どおりにした。
- 一、漢字は、原則として当用漢字を使い、読み難い漢字にはルビを付けた。
- 一、便宜上、句読点「、」並列点「・」を付けた。
- 一、『天保饑愁』と『救荒鄙論』の他に天変地異に関する郷土資料七冊を紹介した。
- 一、『天保饑愁』の解説では、異体字・略字等は当用漢字に直した。

天保飢饉期の上田

尾崎 行也

はじめに

平成一九年度上田市立上田図書館の貴重資料紹介展は、主題を「天保飢饉の上田」とすることにした。同図書館には優れたコレクションが幾つか収蔵されているが、そのなかで最も知られているのは「花月文庫」であろう。この貴重資料紹介展では、以前からこの「花月文庫」を取り上げたいという意向を持っているが、内容があまりにも豊富で、それを一回にまとめて発表することは難しいと考えた。今回は同文庫のなかから選んだ一冊『天保飢愁』を中心に、紹介展を企画することとした。

『天保飢愁』は、松原晋峰によって記録された信濃国上田の天保飢饉の様子である。詳しくは本冊子の同書解説に譲るが、同書が選ばれたことには理由がある。第一は、この紹介展が、平成一三年度の第三回「地域の文化人成澤寛経『百合ささめごと』の世界」（図録の刊行あり）以降、上田図書館で毎月一回開催されている古文書学習会「山なみ」（会長宮島かつ子氏）が、同館職員と協力して企画・展示を実施していることである。第二は、そのことと関連して、学習会資料を古文書あるいは古書に求めていることである。そして第三に上げられると考えるのは、昨今話題となっている地球温暖化による異常気象に関心が高まっていることによる。それらを含めて、以前は「天変地

異」と称され、人間の力をもってしては避けることのできない災禍は、如何に恐ろしいものであるか、それに人人はどのように対処したか、それらを記録した過去の書物に関心が寄せられた、と考えられるのである。

今回の展示は、天保飢饉を一つの象徴としながら、近世の天変地異がどのように記録され、伝えられたかを、上田図書館収蔵の花月文庫を基盤に、その他のコレクションを加えて、関連書籍を選び出し、市民を始め多くの方方に見ていただくことにした。

それらの内容については、本冊子の以下の各解説に示されているので、ここでは繰り返さないことにする。ただ一点だけ触れるなら、天保飢饉に対処する地元上田藩の動きは、例えば『救荒鄙論』と題された版本を作成して領内に配布し、飢饉への対策を教示するとともに、越後米を買付けて領内困窮者の救済に当てるなど、一定の評価を与えられる施策があったということである。

そこで本稿として取り上げてみたいのは、天保飢饉期の上田を見直すということである。一般的に「天保」といえば、「天明」とともに「飢饉」として捉えられる。しかし天明にせよ天保にしたところで、全てが飢饉だけで過ぎ去ったわけではない、と考える。「飢饉」という事実を否定するのではないのではない。例えば、天保飢饉のあとに天保改革があり、飢饉のあった天明も、同八年（一七八八）から改革は始まり、これが寛政改革と称されることになる。飢饉―改革を、偶然の連鎖と言いつけることができるのであろうか。飢饉のなかでも種種の政策が展開され、むしろ飢饉という状況を利用するようにして推進されていったのではなからうか。ここではそうした視点から、天保飢饉前半期（天保三―五年）の上田を、上田城下原町問屋日記によってみ

てゆくことにする。

一、上田藩産物改所

天保飢饉は、一般的に天保三年から始まるとされている。しかし上田の場合は飢饉が強く意識されるようになるのは、翌天保四年になってからだたとみられる。例えば上野尚志『信濃国小県郡年表』（以下『郡年表』と略す）では、「頗凶荒（頗る凶荒）」という項を立てているのは天保四年分である。原町問屋日記でも、天保三年分については飢饉についての具体的な記述はみられず、同年閏一月分に「町在物騒ニ相聞候」として、夜廻りは増番の上嚴重に実施するよう通達が出されている程度である。ところが天保四年になると、一月八日には藩から窮民救済のため難民者の取調べを命じられ、同月一九日に原町・柳町・田町には該当者がいないが、紺屋町では極難民の者が一九件・五四人存在する、と報告している。この日記は原町分のみ記載されるので、海野町分（横町・鍛冶町を含む）については不明であるが、既に極めて難民者（困窮者）が表われ始めていること、しかしそれはまだ一部の町に限定されていたこと、などがうかがえる。しかし日記はこのあと次第に飢饉に関わる記事が多くなる。

それでは天保四年の原町問屋日記（以下「日記」と略す）には飢饉以外の記録はほとんどみられないのかというと、そのようなことはない。例えば天保四年二月六日、藩が発表した領分産物取締絹糸等改所（以下、産物改所と略す）の開設は、上田領内の大問題であった。

上田藩による領内産物の絹糸類販売調査は文政八年（一八二五）にも行われたが、姫路藩主酒井家から上田藩主松平家に養嗣子として入っ

た玉助（後の忠優）が、天保元年松平家の家督を相続すると、城下での絹糸類の年間取引量調査を命じ、翌二年には絹糸改所を設置し、国産品（領内産物）の品質を保証するため改印を押すようにしたいと提案、町方の反対を押し切って前記のように天保四年三月からの実施に踏み切ったのである。これは従来一切が商人に任せられていた商取引に、藩が介入しようとする社会慣行の大変革であり、関係者を中心に領内の大問題であった（上田市誌近現代編(2)『蚕都上田の栄光』参照）。具体的な例を一つ上げるなら、産物改所の開設に当って出された触書五カ条のうち第二条をみると、

一 御領分（絹糸）仲買の者えは、夫々鑑札可相渡候間、組合を立、制度相定可申候（下略）、

とあり、鑑札制度の導入と同業者組合の設立を求めている。また第三条では、

一 御城下店々にて（絹糸）仕入方いたし候者えは鑑札可相渡置候（下略）、

として、鑑札制度を従来の絹糸販売商店（具体的には呉服商など）にまで拡げている。そして第四条で、

一 鑑札申請度者は、夫々其筋え願出可申候

と、早速鑑札の申請を勧誘している。実際、この鑑札を所持しなければ、領内での絹糸の仕入れができず、仕入の次には改印を受けなければならぬという、新しい商法を強制されることとなった。この触を受けて、三月四日には成沢金兵衛（萬屋）を始めとする原町分絹糸系商業者三〇人が、鑑札の交付を申請し、その後も申請者が散見される。

上田の産物改所と絹糸（上田縞・上田紬・生糸）仲買鑑札制導入は、天保三年に藩と業者間の複雑な交渉を経てのことであった。それ

は天保二年九月に始ったとされる松代の絹紬新市および糸市と深く関わって推移する。天保三年一月一三日、例年の日程として上田の紬仲間業者による一統寄合が上田新町向源寺で開かれたが、これに松代領の業者が出席しなかった。すなわち上田の絹紬糸市には、従来領内に限らず近領（松代領・中之条陣屋支配幕府領など）の業者も参加していた。ところが天保二年冬、松代藩で絹紬業者の鑑札制を実施し、その買入および販売に制限を加えるようになった、というのである。こうした情報は、上田原町の呉服商布屋利兵衛や若松屋忠右衛門などから伝えられたが、天保三年六月の報告では、松代領内の買次人（仲買人）は全て鑑札交付者で、その全調達品は、絹紬であれば江戸表二本榎木の信濃屋へ、また糸のうち為登糸（上方移出の生糸）は近江の松井久左衛門、その外は上野伊勢崎の小暮此右衛門に残らず引き渡し、百両に付き一步の口銭（売買受託手数料）を受け取っている、というものであった。同年七月には、そうした制度を実施した松代では、在中（村方）のものが製造した絹紬などを市に持ち出しても買次人に買われるようなもので、値段が下落し、販売を手控えるものがあらわれ、年貢収納（金納）にも影響が出てきたとして、盆前には新規定を中止し、従来の方式になった、という情報も伝えられた。一〇月になっ

て、領内上塩尻村浪吉の事例が口上書として提出された。浪吉はこれまで農間に在方製造の絹紬を買い集め、これを上田城下の市場に持参して商売をしてきたが、松代城下に絹紬新市ができてからは、上田市場へ運搬される絹紬を途中で買取り、松代市場へ移送している、これでは上田市場は衰微してしまふ、というものであった。松代新市の動向をどのように評価するかが、上田の産物改所設置および鑑札制実施の可否と深く関わり、上田両問屋と藩当事者の間で論争が続いた。

天保三年一二月、布屋利兵衛らの報告は、江戸大丸屋・京都升屋・

高崎布袋屋が例年通り上田へ紬仕入にきたが、松代で紬を調達したいというので、仕方なく松代で仕入させ、その上で今後も上田での仕入を依頼した、という内容であった。松代新市の上田市場に与えた影響は深刻だった、といえよう。

天保四年は前述の通り産物改所の開設、鑑札制の実施で始ったが、松代の動向はどうであったのだろうか。三月には松代から大丸屋や岩城屋への交渉がなされ、両者とも松代に赴いたことが報ぜられ、九月にはその内の大丸屋は「松代様最買当年千両」とも伝えられた。そうしたなか一〇月一日には、若松屋忠右衛門から、紬仕入の客衆（大丸屋など）が残らず松代に移動し、そこで紬を調達することになったことを報じ、一二月三日の絹紬市には金詰りのため買入（仕入人）がなく、御支配所（幕府領）の仲買人は買入がないのなら松代へ行く意向を示すなど、領内仲買人は苦境に立たされた。これに対して上田藩町奉行は、買次の者（仲買人）へ資金として三〇〇両貸与の意向を示し、上田両町問屋は早速「紬市入用」として三〇〇両を勘定奉行から借用している（利息五分、返納期限翌年正月八日）。

これとは別に上田市場での「白紬払底」が問題となり、天保四年六月、次のような触が出された。

絹紬仲買

当郷	定四郎
馬越村	長太郎
越戸村	四郎治
仁古田村	常治
下室賀村	由右衛門
町小泉村	文吉
下之条村	甚三郎

右之者共江御領分産物之内白紬出方拂底ニ而差支候向茂有之趣相聞候間、此度元手金貸渡候ニ付、最寄村々江相勸可申候間、其旨相心得、銘々為助ニも可相成義ニ付、以相對真綿等借受、織成方出精いたし可申候、尤右名前之者共江茂不正之儀無之様申付置候ニ付、相当之直段を以売渡可申候事、

右之趣浦野・小泉兩組江相触置候ニ付、於（産物）改所茂其旨相心得可申候、

（天保四年）六月

この触は上田領内浦野・小泉兩組に宛てて出されたものであるが、同年一二月には領内田中・国分寺兩組にも同様な触が出されているので、合わせてみておくことにする。

御領分産物之内白紬拂底ニ而差支之筋茂有之趣相聞候、右ニ付田中組・国分寺組之内江別紙名前之者共、（天保五年）来午正月（よ）村々相廻り、示談之上真綿を賦り、糸機織方等夫々教込候様いたし度段申出候間、承届候ニ付、村々役人共江茂申談相廻り可申ニ付、万端実談を以取扱可申候、右者婦人手業之儀ニ付、急ニ吞込候様ニも參間敷候得共、連々心掛候得者、助德を見候ハ目前之義ニ有之、殊ニ糸機之儀者婦人之本業ニ而永續いたし候得者、銘々身為ニ相成候義者勿論、専国益を引立候基ニ付、得与勘弁を加可心掛事、

右之趣小前末々迄不洩様申聞取扱可申候、

（天保四年）十二月

紺屋町 利左衛門
西脇村 字 作

善四郎

諏方部村 清三郎

菊太郎

新町村 清次郎

三郎次

生塚村 宗十

茂作

新兵衛

新町村 笹沢益之進

メ拾老入

右書付者先日中御渡被成候処、右拾老人之者改所江呼、兩人ニ而御聞濟之趣申聞候様被仰聞候ニ付、呼寄右御触書為読聞、不制之取計方無之候様申渡候、

これによると、上田領内における白紬の払底（品切れ）への対策は、領内の絹紬仲買人を起用し、そのなかから数村あたり一人を選び、そのものに元手金を貸与し、それぞれの近村のうちに機織の希望者を勧誘し、原料とする真綿を配り、機織の技法を伝授し、白紬を織らせ、相應の値段でそれを買収せらる、というものであった。織手の説得にあたっては、機織が婦人の本業であり、永續（継続）すれば、まずは自分の利益になるし、更には国益（藩領内の利益）を盛り上げる基となることを強調するように、とすすめている。また村役人の協力や産物改所の納得を求めている。すなわち、仲買人を単なる生産品買い集め業に止どめるのではなく、生産体制に積極的に参加させるというもので、真綿の提供と技術の指導により、地域農家に賃機を織らせ、領内の白紬生産を向上させ、その安定自給を計るというものであった。



図1 上田城下町 呉服店、「上田縞を名産とす」とある。（『善光寺道名所図会』）

上田における絹紬の生産は、近世前期からみられるが（上田市上田博物館『上田紬』）、江戸後期になるとその生産の中心は更埴地域から高井地域にまで伸びていったとみられる。例えば松代の紬あるいは中野の紬がみられるようになる。上田の市場にとって、松代領や中之条支配所（幕府領）などでの絹紬（さらには糸まで含めての）買入れが重要になっていったのは、そのためであろう。しかし更埴地域、特に松代藩では、その領内産絹紬が上田の市場に出されて利益の流出がはつきりするようになると、これを問題視し、新市開設をすすめることになったのであろう。

上田領については、江戸時代を通じて絹紬類が一定量、しかも相当量生産されていたとみるのは危険である。むしろ為登糸や蚕種製造に重点が移ると、絹紬の生産量が減少すると考えるのが自然ではなからうか。一九世紀となる江戸後期は、上田における蚕種製造が発展する時期に当たっていた（上田市誌『蚕都上田の栄光』）。しかしそれは、絹紬に対する一般の需要が減少したことを意味するわけではなく、むしろ絹紬の需要増加の反映と理解することが可能であろう。しかも上田縞（当時は「上田嶋」あるいは「上田島」と記す）や上田産の白紬・縞紬（当時は上田紬という表記はあまりみない）は、地域の名産としての評価が定着して（上図参照）、常に一定の需要があった。

それを見通し、国益をもたらす重要な領内産物として積極的に取上げようというのが、上田藩の産物改所開設政策であったといえる。天保四年は、そうした政策を実施すべき年として、既に位置付けられていた。従って飢饉の波が地域に押し寄せてきてはいても、それへの対応もそれなり行ないながら、既定の政策は実施、推進されたのである。

二、鑑札制度の実施

上田領で諸職人の間に仲間（組合）が結成され、規定が作られたり、取締役の「頭」が任命されたのは、真田氏統治期（元和八年）にさかのぼるものもある（上田市誌『城下町上田』、以下も）。江戸中期には大工・木挽・萱屋根師・畳師・桶屋の五職について、他所（他領）の職人の活動を禁止する通達が出され、文政四年（一八二一）には前記五職に石工・左官・瓦師を加えた計八職に対して世話役を任命するとともに取締を強めた。天保飢饉が始まる同三年二月、上田藩は他所職人について「取扱方心得之覚」と「制度書」を出し、種類の規定を付けながら領内での活動を認め、同時に前記八職に対して鑑札（営業許可証）の交付を伝えたと共に冥加銀（営業税）の納入を命じている。

これは藩が職人の統制を強化するものであったが、一方では職人の領内における営業権を保護する意向を示すものであり、職人も権力によるこの保証を、実質的な利益確保に加え権威付けにもなると理解して評価し、冥加銀の納入には肯定的であったとみられる。

経済活動を活発化させていた上田領内蚕種業者のうち上塩尻村の同業者六六人が、藩に冥加永（営業税、永は銭表示）の上納を願い出したのは天保二年のことである。これに対して藩は、天保四年四月「蚕種商人制度書」を示し、他国産蚕種の販売禁止、種紙（蚕卵紙）への「信州上田産」捺印、蚕種（蚕卵）一〇〇枚あたり銀七匁五分（金二朱相当）の改判料納入を条件に、一代渡切の鑑札発行を発表している（上田市誌『蚕都上田の栄光』）。

上田領内での木綿の反物については、寛文六年（一六六六）に「尺なし（尺幅不足）」が取締られており、その後も折にふれて尺幅改が通達されている。天保五年四月にも木綿の大幅不足が問題とされ、さ

らに五月朔日からは産物改所で絹糸同様に改めを実施すると発表した。すなわち「白木綿・嶋（木綿）并太織（横太織）・糸織・交せ候品（木綿）共、尺幅改印請、売買可致」とし、木綿一反の尺（長さ）は二丈六尺（約九、八五m）、幅は九寸五分（約〇、三六m）と示し、判銭（尺幅確認料）は白木綿と縞木綿が一反に付き銀五厘、それ以外は一反に付き銀一分を納めるよう通達した。また木綿太物を取り扱う城下町商店の仕入方および領内の仲買人には鑑札を渡すという通知もあり、同月のうちに原町分で、原町の伊藤源七ら三六人、木町で布袋屋忠兵衛ら九人、柳町で小宮山龍兵衛以下二五人（在分を含む）、計七〇人から木綿横太織鑑札交付願が出されている。

綿打職人についても天保五年五月に取締を目的とした世話役兼篠巻目方改役が任命され、有効期間半年の鑑札を発行するとともに、半半分銀五匁の鑑札料を徴集することになった。同年一二月には綿打七〇人分の鑑札料金四両三分三朱余を納入することになったが、菓子屋の鑑札料は金一朱（銀三匁七分五厘）、紺屋は銀四匁（いずれも年額）であるのに、綿打のそれが高額なのは迷惑であるという意見が出され、藩も今後配慮する意向を示した。篠巻とは、細い竹に綿を巻き付け筒状にしたもので、これから木綿の糸を紡いでいた。篠巻一把は六〇匁（約二二五g）と定められていた。

「繭巢売」というのは、繭と巢売に分けられると考えられる。巢売とは巢穀繭のことで、出穀繭、すなわち蛾が出てしまいい生糸をひくことのできなくなった繭を意味する。この巢穀からは真綿が造られ、さらに紬糸を経て紬（織物）となった。上田藩はこの繭巢穀真綿の買入れについても鑑札制をとっていて、天保五年五月の中旬から下旬にかけて原町で三五人、柳町で一三人、木町は七人、田町一人の合計五六人が繭巢穀真綿の鑑札交付願を提出している。

綿打職人のところで紺屋の鑑札料についても触れておいたが、天保五年五月に紺屋の手間取下職の取締と合せて鑑札制実施を伝えている。「手間取^{てまどり}」は手間賃をもらって雇われることで、当時「下職」が「形付・上絵かき・模様かき・庭職・かなしぼり」などと多様化し、それに従って染代が高騰していたことが問題とされた。これは贅沢禁止令にも通じるものである。

菓子屋は天保元年暮から仲間結成の運動を始め、翌二年三月に仲間結成の許可願を提出し、同四年六月には冥加金上納を条件に取締を願ひ出している。これは在方（農村部）で同業者が増加している（菓子の在方普及）ことを抑制する目的があった。しかし飢饉の時期にあたり、天保四年八月には穀物を使用した菓子の製造は一切禁止する旨の通達が出され、同年九月には木町の駒屋忠左衛門が蕎麦を用いて菓子を製造し、中止を命じられている。駒屋は小諸饅頭取次の看板を出していたが、取次なのか製造なのか紛らわしいとして、同年一〇月に取次の中止を命じられた。

天保五年三月、小麦の流通が改善されたことを理由に、菓子屋に対して麦菓子の製造を平年の半数（五割）という条件で許可した。同年五月になって藩は菓子屋についても取締に重点を置いた鑑札制度の実施を発表し、取締方世話役を任命して仲間議定の作成を命じている。

その外では、他所から上田領にくる薬商人（薬売）についても鑑札制を実施している。天保五年二月のことで、ここでの理由は「近來諸商人・諸職人取締申付候に就ては」とあり、広範囲な職業に対して取締を目的とする鑑札制を一つの政策として推めていたことがわかる。薬売の鑑札料について、上田領の小県郡内（上田を含む）は銀一〇匁

（金二朱余）、更級郡では五匁と定められた。（左図参照）

天保五年暮、藩は次のような通知を出した。

一 産物改料并蚕種改判銭、其外諸鑑札料等、上之御遣用ニ相成候御趣意ニ而無之、畢竟者為ニ取締ニ改被ニ仰付ニ候事ニ付、右判銭者諸入用差引、殘金之義者 在町役人江割合預ケ置、積金ニ被ニ仰付、御領内之者非常御救御手当ニ被ニ成下ニ候間、御趣意之處得与相弁居可申候事、

改料や鑑札料の使途が取沙汰されたのであろう。それは、必要経費を差引き、殘金は領民の非常救済手当用に積立ておく、と説明している。すなわち改料や鑑札料を直接藩の経費に流用することはない、というのである。領内の商工業が振興し民間に資本が蓄積されれば、藩の赤字財政を補填する方途は外にいくらでも考えられたのである。そのため、飢饉の時期を迎えようとも、藩は基本政策を着実にすすめていたといえよう。

（丁亥八月）

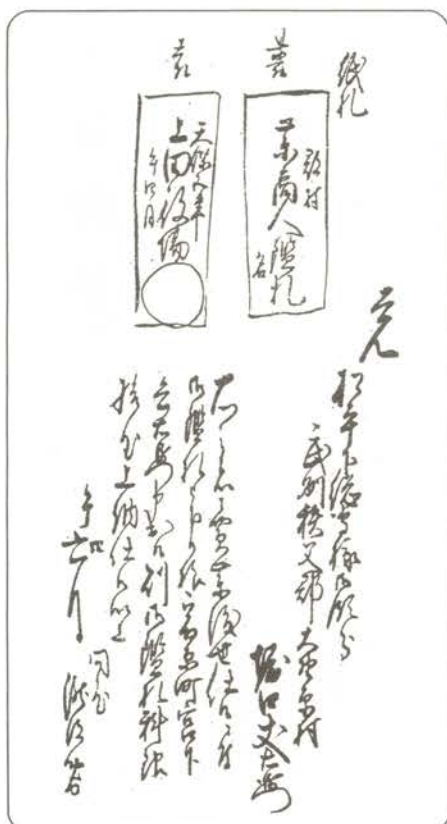


図2 天保5年売薬鑑札交付願の雛形

天保饞愁

天保饞愁物価等記録

飢愁序
世の中ハ皆ハ飢愁ノ世ナリ
先ハ閑夜ニ磔ハレハレモハレモ
先ハ飢愁ノ世ニハレモハレモハレモ
飢愁ノ世ニハレモハレモハレモ

『天保饞愁』

解説

(表紙)

上田海野町 松原晋蜂

(東山堂主人)

天保饞愁物価等記録

天保饞愁 全

飢愁序

世の中ハ皆ハ飢愁ノ世ナリ。ふんかんと一茶がいゝしもむべなるかな
一寸先や闇の夜ニ。磔をうつも心がら。先の愁に気もつかず。或者
三味線笛大鼓うてやさわげも。ゆめのうち
少の内に世の中も。ひつくり蛙のつらに水。かけたることく縮り。
空や不食も高野山香物大師ニ粥をかて。やつとむぐつて。出たらめを
書たなんぞといわば言。などゝすねるも筆の癖堪忍さんせ君子達
奥をひらいて見給へねと。しかつべらしく言ものハ

於珍理房の楼上に

常田の城東 海野町住

松原晋蜂述

飢饉集出ス

（應）
せんの上ハ ありし昔に かわらねと 米喰人のうちぞ 床しき
（か）（い）
空の庵まつ風

饑愁

夫人として一生の間に愁悦難なきものハなし、その中にもきゝんほ
との大難ハなしと古人是を禁けれども其難こと共しらざるもの多、中
にハ其うれひを見聞せしものにてものと元すきればあつさとやらのた
とへのことく、年月すくれば又なき

ものゝ様におもひ、嘶にきゝてもよそことにきゝおく、さのみ愁とも
おもわす有ものは呑喰ひ又来秋ハとれる物とおもひ其貯なき事をいと
わす、月日をいたつらにすごすもの多き故ニ、天是を禁給ふにや、去
天明卯年の飢饉出羽奥州ハ格別関東殊の外大飢饉ニて諸人こんきうせ
し事おびたゝかしく

況や親兄弟にもわかれ乞食非人と成終にハ餓死せしものゝ多、其かな
しみ言語尽しがたし「尤是ハ農諭といふ書物に審見へたり」夫ほと
かなしみも年月すきれば忽にわすれ、元の如くにおもひし族おゝく、
農業もおろそかになし、米穀鹿末に取扱金銭のつかへもいとわず奢に
長じ、我俤に吞食ひし処、光陰ハ矢よりもはやく

既に五十余年をへて今天保四年巳年とハなりにけり、然ル処夏中長し
けにて秋作実のらず諸国飢饉、中ニも出羽奥州信州ハ格別の凶作にて

少る月々甚る中もむ川を軽ろ
つゝ水。さるあふさく綿空や
不食も高野山高木大師張を
うて。川いも川く。出もふや
書もえんぞといも言。あゝと存
かもし筆乃と群氓堪へんも不
負をむつて見入人移るう
言もハ

於玖羅理乃樓上

常田乃城東海軍所住

松平重隆述

[illegible]

13

[illegible]

根を食ひて其毒ニあたり血を吐腹ふくれて死せしものも有しとなり、
誠前代未聞の事ともなり、況や四年間ニ三年の凶作たる故ニ心有もの
ニても其貯つて難洩せし事成に平常貧窮ニくらすものハ其餓をまぬ
かるゝ事不能きなんせしもことわりなり、誠古今珍敷飢饉たる故ニ
諸人のなけきいうびやうもなく、何卒して其命をつがん其餓を

しのがんと、或^{あるへは}者^{やまに}山^{のほり}ニ登^{またたに}り又^{くだり}谷^{くず}に下^きりて葛^{木の}わらびの根^ミをほり木^ミの実^ミを
 ひろひ、又女^{おんな}童^{なわらべ}ハ野^のニ出^でて夫^が食^じになる^くべきものときくときハ何^{なに}様^{よう}なも
 のたり共^{とも}かり取^{とり}是^{これ}を夫^が食^じとし、終^つニ野^のも山^{やま}も焼^{やけ}野^の々^{ごとく}如^{ごとく}く取^{とり}あらし、
 又^{へん}辺^ど土^ちの輩^{とも}ハ犬^{いぬ}猫^{ねこ}までも食^く尽^{つく}終^つにハ命^{いのち}を失^{うしな}ひしもの多^{おほく}しとなり、
 誠^{まこと}前^{まへ}代^{んだい}未^み聞^{もん}言^{ごん}語^{ごう}同^{だん}断^{だん}の事^{こと}ともなり、夫^そより翌^{よく}酉^う年^{ねん}

の春になりて暖氣だんき催もよほすのしたかへに隨したがひ所々ところどころ時疫ときえき悉ことごとく流行りゅうかうし、前年ぜんねんの冬ふゆより
 米穀まいこくハ稀まれニして草根木実そうこんぼくじつのたぐひのミ夫食ふしきとして其命そのいのちをつなきし故ニ、
 身みも劣おと心しん躰たへ常つねならざる処ところへ時疫ときえき流行りゅうかうし、其病そのやまうくるものハ心しん躰たへ爰こゝ
 にきわまりて只必死ただひつしをまつばかり、たれあつて薬くすりを求もとめて能あたふふるものも
 なく又食たをすゝむるものなき故ニ、

餓を凌ぎ出して、しのぎ 出しものも又此病のため、このいたつき 命をうしのふもの夥、おびたく 爰ニ

大慶九年

来るべきものはかりかたけれハ、随分と心を用ひ其貯致度ものなり、此
かなしみを、眼前に見し故ニ後の助と成へきがために慥ニ見聞せし事
を揚て巻につゝり置ぬ、此書を見給ふ其人者、何卒我心に随ひ農業を
専として五穀成就を祈念被_レ致しかば、国豊家内安全富貴萬福うた
かへなし

15

祝^{いわ}之^を長^{なが}年^{とし}も壽^{ことほ}き々^々弟^{あに}年^{とし}々^々分^{ぶん}々^々にハ氣^き
 を移^{うつ}し五^ご麦^{むぎ}仍^{なほ}りゝまは旅^{たび}程^{ほど}中^{なか}分^{ぶん}々^々
 係人^{けいじん}在^あ候^う思^{おも}ひなり也^{なり}~~~~~喜^{よろこ}び豊^{とよ}年^{とし}末^{まつ}

[illegible]

麦は秋に種を蒔き、春に収穫する。その時、
 新米が上市し、旧米は安くなる。この時、
 多くの人々が新米を買い、旧米を売る。この時、
 親戚や友人も集まり、酒を飲み、歌を歌う。この時、
 村の長老も集まり、村の未来について話し合う。この時、
 人々は希望を持って、未来に向かって進む。

農村改革の必要を強く感じ『農諭』を著した。この本は一〇項目にわたって領内農民に、飢饉の悲惨な状況とその対策、心構えについて認めている。松原晋峰がこの書物に大きく刺激され影響を受けたことであらうことは『天保饑愁』各所に、農諭からの引用が見えることから伺える。

「第三饑死人の事」の中には天明三年（一七八三）に起きた奥州の飢饉の後、上州新田郡の高山彦九郎が奥州一見の旅に出て目にした事実として、次のように書いている。「村里に人の気配がなく不思議に思つて見回せば、畑の跡は茫々たる草むらとなり、家々は皆倒れ傾いて、いぶかしく思いながら空家に入つて見れば、篠竹など縁を貫き出て、その間あいだに人の骨が白々と乱れていて目も当てられず、驚き身の毛もよだつ恐ろしい思いで、荒れ果て寸断された道を駆け走り、人の住む里にようようの思いで辿り着いた」これは著者自身が相違なく聞いたことで、大飢饉の恐ろしさ、餓えて死に尽くす有様はこの一条をもつて察すべきこと、と記されている。

天明三年の穀物高値となつた相場が、自国及び各地について記され、このほか蕨の粉・くずの粉・木の実・草の実等々およそ食べ物になるものは売り買いされたことが記されている。これまでの飢饉を見ても、寛永・延宝・享保・天明と三、四〇年の間にあり、長くても五、六〇年の内には飢饉は来ると思うべきである。年月が過ぎ、天地の災いもなく豊かな世になると、飢饉の困窮を忽ち忘れていたが、人の生涯には飢饉のあることを忘れず、常に食物を貯え置くこと、その種類、方法、保存に至るまで記し、農業に励むことを農民に諭している。また

楊を食ひて其毒にけりし血を吐腹く
 まるゝと云ふ事ありきなりと傳へば又
 り事も有り傳へ四年間之を年々此方
 智有ともども其針ついで難治也一
 年常實病するもそのハ其鐵をこぼさず
 ふれど多ん出たりしと云ふ事なり
 此後加藤の及み諸人より多くいふ事
 もよく伝承して吾人を信らん其鐵を
 あらふと云ふ山登り又谷入りて蜀
 しむる根をあらう本意をわたり又
 女童ハ世に出づ夫食する所日経の
 とくは根をあらうと云ふ事あり是を
 夫食として傳へ中にもや然らずと
 伝へし又遠く華大橋まで食を
 傳へ合点せじとの事なり傳へ
 東文吉氏同様に事をもり又下り龍峯

『農業全書』
(宮崎安貞著、

初版元禄十年）を読むことを勧めている。五穀、山野菜の類をはじめ果木、諸木、薬種の類などに至るまで、体系的に栽培方法や効能を詳しく述べている。農業の術を深めて耕作に努めることを説き、人を養う五穀の尊いことをわきまえ、そうした心掛けが妻子や他の人に及んでいけば、いずれ災難は避けられ、喜びとなるであろうとしている。

上田図書館の藤廬文庫には文政八年（一八二五）版『農諭』と、藤廬文庫を蒐集した佐藤善右衛門自身が『農諭』を自筆で抄録し綴った小冊子がある。また享保二年（一七一七）版『農業全書』が収蔵されている。山崎文庫にも文政八年版『農諭』、天明七年（一七八七）版『農業全書』が収蔵されていて多くの人の心を引き付けた書物であり、飢饉に対する関心の高さが判る。

四、『天保饑愁』に見る穀相場



「農業全書」より、農事図

一、わくわくもあつた。その時、
 分存をわくわくもあつた。時疫流行
 其病うに多く、その時疫流行
 二、わくわくもあつた。その時疫流行
 三、わくわくもあつた。その時疫流行
 四、わくわくもあつた。その時疫流行
 五、わくわくもあつた。その時疫流行
 六、わくわくもあつた。その時疫流行
 七、わくわくもあつた。その時疫流行
 八、わくわくもあつた。その時疫流行
 九、わくわくもあつた。その時疫流行
 十、わくわくもあつた。その時疫流行

上田藩では天保五年と同八年に疫病が流行している。同五年五月横町・鍛冶町・紺屋町に疫病が多く流行し、藩では他領からの止宿の者も含む病人の人数調べを命じている。六月十一日に真田村白山寺に十七日（ひとなのか）の厄除け祈禱を命じ、そのお札を町内に配っている。同七年九月、藩主自ら白山寺へ参詣し、十二月には下之郷諏訪明神・白山寺・大宮に来年の氣候順次・五穀成就・疫病除けの祈禱を命じ、そのお札を配った。医療の未発達の時としては、神仏への祈りは大きな意味を持ったであろう。同八年にも疫病が大流行し、横町・鍛冶町・紺屋町に病人が多く出たという。飯縄社にて疫病除けの祈禱を命じお札を配ると共に、領内の病人や他からの止宿者にも薬を与えている。享保十八年（一七三三）疫病流行に際し幕府から出された注意書は、天明三年・天保七年にも再び領内に配られ、疫病や食中毒に対応している。『天保饑愁』には同八年に「薬を求めても与えるものもなく」となっているが、その時上田藩で薬を与えた家数は一万四三二〇戸に及んでいる。

七、船方村及び大笹村の飢饉の風聞と実態

『天保饑愁』に房州船方村（現千葉県館山市船形）の飢饉の様子として、一〇〇〇軒程の大きな村であったが、疫病が流行して三ヶ月程の間に一九五〇人の死者が出た、と書かれている。館山市博物館の資料によると、実際は次のような状況であった。「天保七、八年頃には多く人が村方から借金をしたり、村方へ合力金の提供があったという

信江之南 金之南 月之南 第之南 中 之南

附錄

『救荒鄙論』

本書は、藤廬文庫（とうろぶんこ）に収蔵されており、著者は不明、天保五年（一八三四）に刊行された。藤廬文庫は、藤本縄葛（つなね）が蒐集、写本した書物で、六四三四冊からなる。藤本縄葛の本名は、佐藤善右衛門縄葛（一八一五～一八九〇）といい、一七世紀中頃より上塩尻村（現上田市）で代々蚕種業を営んでいた。藤本は屋号で、藤廬は、藤本の廬（いおり）の意味である。

昭和三十一年（一九五六）に曾孫に当たる人より、上田図書館に寄贈された。

『救荒鄙論』は、天保四年（一八三三）に凶作が始まると、翌五年に上田藩より領内の村々へ一冊ずつ配布されたものである。原町『問屋日記』天保五年四月二七日の項にも次のように記されている。

「救荒鄙論と申す板木一冊、外ニ四ツ切老枚、右は草木の類、食物ニこしらへ方並喰合禁物、又は草木の毒にあたりたる節の葉等、しるしたる本也。原町江老通り、紺屋町江老通り被下、早々申聞候様被仰付候」

木版刷り三六頁の冊子で、平仮名（漢字には、ふりがな）で書かれており読みやすい。

木・葉・草・根には、人体に有害なものが含まれており、特にアケ抜きが重要である、と書かれている。多くのカリウムを含んでおり、カリウムは、体内に必要なものであるが、過剰に蓄積されると、心臓に負担がかかり浮腫が出たり、心臓が止まる等の障害がでる。不要のカリウムを体外に出すためには、塩（ナトリウム）が必要で

ある、といわれている。

後年藩は「御恵塩」を領民に配布したが、理にかなった対策であった。味噌は三年ものが良いとされているが、発酵による味の良さだけでなく、備蓄して、飢饉時の塩分・蛋白源として役立てられた。

本書の解説文が『長野県史・近世史料編第一巻（二）・東信地方』に載せられているので、ここでは内容の一部をわかりやすく紹介する。

菜や乾し葉の代りに用いる類

菜葉・木の芽の食べ方には種々の方法がある。苦汁（アク）のとり方が悪ければ毒にあたり、直後に症状が出るか、後日に浮腫を生じたり、悪質な湿疹や腫物を生じることがある。食物は、命を保つ大切なものであるから手間をおしまず作り方に念をいれること。

○甘草（かんぞう）……若葉をゆでて、水に浸しアクを取り、よく絞って細かに刻み、塩を少し加えて、飯の炊き上がる寸前の水のあるところへ入れる。ハコベ・ナズナ・アカザ・ツユクサの食べ方も同様にする。

○皂莢（さいかち）の若葉……

……ゆでた後に水を換え、二、三日浸し置き、塩を加えて菜・乾葉の代わりに用いる。

○五加菜（うこぎ）の葉……

……ゆでた後に水に浸し、水を換えて二、三日浸して置き、塩を加え用いる。



さいかち

○ スイカズラの葉……製法前に同じ。

また、灰湯で煮て、水にさらし用いる。塩を必ず用いる事。

○ 藤の若菜……灰湯で煮て、水を換え三日程浸し、水にさらし用いる。妊婦には禁忌。灰汁は堅い木の灰を用いる。松、杉の灰は効果が無い。

○ ひるがおの葉……長く食すれば、めまい、腹にあたる事あり。

粉につくる類

○ 葛の根……土の表面より五、六寸の所は、毒があるので切捨て、それより下を用いる。乾して貯蔵してあるものは、上皮を剥ぎ捨てる。臼に入れ、杵にて搗き砕き水を入れて手で揉み、この水を桶に入れ上水を捨て、沈んでいる粉へ再び水を入れ、かき混ぜ上澄みを捨て、これを一〇回程繰り返し、その後粉を陽に干す。臼の中のカスも更に水を入れて粉を取る。土より掘り出した直後のものは、そのまま搗いて用いてよい。この粉をこね、団子・餅・麺類等にこしらえ、蒸したり、ゆでて用いる。蕨の粉と一緒に用いるは禁ず。

○ 蕨の根……葛の粉をとる方法と同じ。米の粉、麦の粉に混ぜて用いる。この他の粉には混ぜないこと。ぜんまいの根も同様。



藍葉

すいかずら

○ からすうりの根……皮を削り、白い所を細かに刻み水を換えて浸すこと五日程、取り出して搗きくずし、水を入れてかき混ぜ、布袋にてこし、葛の粉のごとく、水を一〇回ほど換え、陽に干して用いる。焼餅・麺類・団子等に拵えること、前に同じ。

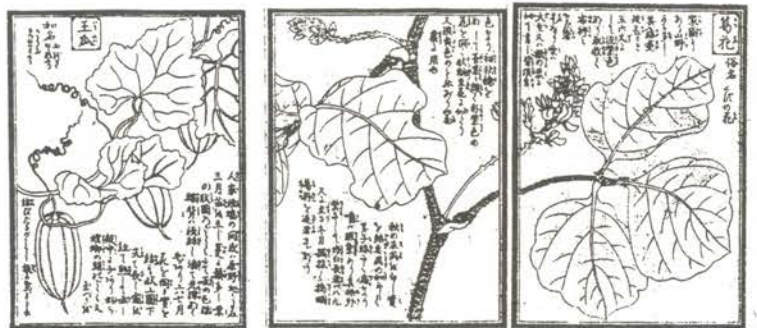
○ くぬぎの実・ならの実（どんぐり）・とちの実……皮を剥き、三度程煮こぼし、その後水に三日程浸し置く。取り上げて陽に干し、臼でひき、ふるい、また、水に浸し水を四、五回換え。陽に干して用いる。米の粉等にまぜ、餅・だんご・焼餅等に拵える。

○ 野老（ところ）の根……髭・皮をこそげ去り、刻み、よく煮て流水に二、三夜浸す。苦味を取り去り、陽に乾かし臼でひき、ふるい、その粉を水に入れ三、四回水を換え用いる。ひるがおの根・かんぞうの根も右と同様にして用いる。

○ 米糠……篩でふるい、荒粉を去り、米の粉・小麦の粉・蕎麦の黒粉等を等分に混ぜ用いる。

飢えたる人の養いよう

○ 人、数日食せず飢え苦しんで死にそうな時は、まず飯を与えて



からすうり

葛

はならない、若し食すればたちどころに死す。みだりに服薬をしてはならない。

○ 手拭を熱湯に浸し、臍のあたりを暖めれば自然とよみがえる。其の時、白湯の中に味噌汁または重湯を、少しサジでかき混ぜ飲ませる。腹を潤し、その後によく煮た薄い粥を食べさせ、兩三日の間に段々粥を濃くして食べさせる。数日後に軟らかな飯を食べさせる。

大麦挽割の足しに用いる類

○ 粟……皮を剥き水に浸し、縄（なわ）で揉み洗い渋皮をとり、陽に干して荒く搗き碎き、割麦のように米に混ぜて用いる。

○ くぬぎ・ならの実・とちの実……皮をとり、よく煮て、黒い汁を捨てる。流水に一、二夜浸し置き、陽にて乾かし、臼で搗き、割麦のごとくこしらえる。

○ 野老（ところ）の根……細かに刻みよく煮て流水に一、二夜浸し、灰汁で煮て換え、二、三日程浸し、苦味をとり、乾かして用いる。

○ 菖蒲の根・おけらの根……細かに刻み、灰湯でよく煮て、流水に浸し苦味を取り去り用いる。

解毒の方法

○ 諸々の草の毒にあたった時は、重湯に焼き塩を少し加え、三、四杯食す。生姜の絞り汁を飲む。卵黄を多く飲む。葛の生根を絞り、汁を用いる。乾した根は煎じて用いる。黒大豆二匁と甘草一匁を煎じて用いる。藍葉を絞り、汁を数碗飲む。生藍葉のない場

合は、紺屋の藍汁、または画家の用いる青代黒（あおいろう）を溶き用いる。

○ 蕎麦の毒にあたった時は、大根の絞り汁を飲む。杏仁（あんずの実）を搗き碎き、湯にて飲む。九年母の絞り汁を飲む。

○ 茸の毒にあたった時は、香油（ゴマの油）を多く飲む。生蓮の葉を搗きくずし水にて飲む。

○ 松茸に酔った時は、豆腐を食す。

○ すべて毒にあたり、胸甚だ苦しく吐き気ある時は、塩湯を茶碗に一、二杯飲み、鶏の羽を口の中に入れ、咽をさぐると必ず吐く。

毒草

・ 天南星（天なんしやう・やまこんにやく）

・ 半夏（はんげ・からすびしやく）

・ 野葛（のくず・つたうるし）

・ 蛇莓（へびいちご）

・ 鳶尾（いちはつ）

・ 玉鬘（ぎぼうし）

・ 草烏頭（かぶとばな）

・ 鳳仙（ほうせんか）

・ 蓖麻（とうごま）

・ 鈎吻（おにぎり）

・ 鈴すり花（すずらん）



とうごま



へびいちご



合食禁あらまし

・田螺（たにし）に蕎麦　・縁豆（やいなり）に櫃子（かやのみ）
・野老（ところ）に泥鰌（どじょう）　・柿に蟹　・青梅に胡椒
・栗に李（すもも）　・昆布に野老（ところ）　・金柑に甘藷
・蒟のトウに皂莢（さいかち）　・文蛤（はまぐり）に茸類
・葱に蜂蜜　・蒜（にんにく）に生魚　・紫蘇に鯉　・生姜に焼酎

養生の事

凶作の時は、素食を食するゆえ腹の空くことも早い、二月彼岸より耕作もだんだんにせわしくなる故、空き腹にて強く働くときは脾臓・胃を傷めることがある。蚕豆粥（そらまめがゆ）・豌豆粥（えんどうがゆ）等を拵え置き、三度の食事の外に、朝十時頃親碗に一杯ずつ食すれば、脾臓・胃を傷めることはない。

蚕豆粥の作り方は、蚕豆を二、三日水に浸し置、軟らかにして鍋に入れ、水、塩を入れ良く煮る。豌豆粥も同様に拵える。この粥の中へ赤小豆・白小豆・黄大豆・稗・粟等は好みにまかせ混ぜる。割麦を混ぜればなおよい。

どんぐり・ところ・ひるがおの根・菜・大根の類は好みにまかす。米・麦等なく粗食のみにて凌ぎたる者は、米が手に入った時は、一度に沢山食すべからず。脾臓・胃を傷める。先の粥を拵え二、三日粥を食し、その後飯に炊き食す。大麦・干し菜等を必ず少し混ぜること。山芋の干したものと黒胡麻を等分にし、白でひき、粉に拵え置き、腹の空いた時に白湯にかき混ぜ一杯ずつ飲む。飢えをしのぎ、補薬にもなる。

挿入画は、花春文庫収蔵の『広恵濟急方』より引用した。

花春文庫（かしゅんぶんこ）は、旧上田藩主松平家所蔵の書籍である。昭和十四年（一九三九）に旧上田藩最後の藩主松平忠礼の正室・豊子より上田図書館に寄贈された。和漢書一八八点二〇〇九冊。洋書三三点三六冊からなる。「花春」は、豊子の雅号であることから名付けられた。

『広恵濟急方』は、多紀藍溪著、寛政二年（一七九〇）に刊行された。素人にも判るように平仮名で書かれ、絵図が多く掲載されている。上中下三巻から成る救急処置の家庭医学書である。

本書の末尾に当時の医学書が幾つか紹介されている。その中の本書の紹介文には「以前からある専門書より選り出し、一つ一つ試験して良法を選んで書いてあるので、素人のみならず、医者も活用することが出来る。もともと手近にある草木・虫・魚を選んでその形状を図にしてある。溢死・溺死等は、その手技を描いて治療が行えるようにした。医者を持たずに救い、苦しみから逃れることが出来る。」と書かれている。

本書は、天明の大飢饉の後、間もなく刊行されたもので、その後の飢饉時にも役立てたと思われる。



『救荒鄙論』の表紙

上田城下町『本陣日記』に見る天保飢饉

はじめに

上田図書館利用者団体である「古文書学習会 山なみ」は、上田図書館所蔵本を資料として解説を行なうと同時に、上田城下町『本陣日記』の解説を行なっている。

今回の貴重資料紹介展に合わせて、天保期の『本陣日記』から、飢饉に関連する項目を拾い解説をした。日記から見える上田における天保の飢饉対策を探ってみる。



一、お困い糶のこと

天保元年（一八三〇）寅年は、全国的に違作の所が多く見受けられ、上田藩では飢饉に備えて米の備蓄を行なうことにし、町へ糶を廻っておく蔵を建てるように申し付けた。蔵と糶の出し入れなどに

必要な土地は約百坪ほどで、蔵普請金五〇両は藩が負担するので、後は町方で建てるように言われたが、原町分の町々では建てる場所がなかなか見つからず、馬場町にある藩士屋敷内の空き地を借りた、と願ったが聞き入れられなかった。ようやく海野町本陣の裏を百坪借りられることになり、そこへ東西六間・南北三間、瓦屋根の困い糶蔵を建てることになった。建築費は約八〇両かったという。人足も町で用意した。

困い糶は、年貢として納める分から差引いて町へ預ける形が取られている。

二、穀屋が申し渡されたこと

天保四年七月二十六日、総町の穀問屋が会所へ呼び出された。米穀が底について高値になり、町人は難儀しているものが多いので、米を買い求め取り扱いでいる者達を救うために藩の米を払い出すので、望みの穀屋は、房山・山口両村の郷倉へ、朝五ツ時分から夕七ツまでの内に出向いて買い求めるようにとの達しがあった。

払い下げられた米は、銭一〇〇文に付き一合安の割合で、一人へ二〇〇文までを売るように申し渡された。

同年八月十一日には、町役人連名で次のような願書が出されている。

「今年は夏以来の不順な気候で、秋作がどのようなになるかも推し量れず、米の値段はだんだん引き上がり、飯米に差支え、お払い米

でこれまで取り凌いできたが、米の流通が無く、穀問屋・米を掲いで売っている者は、小売も出来ないでいる。あちこち聞き合わせてみたが、俵数改めがされているので、売る者も無い。慈悲をもってお払い米を出して下さるようお願いしたい。

その米の売り方は、町内家内人数を調べ、切手を渡しておき、一日一人三合、七歳以下は一合五勺。旅人も一夜一人同断としたい。」

この願い出に対し、藩では早速翌日穀問屋に米三〇〇俵の払い下げを行った。海野町分一五〇俵、原町分一五〇俵である。藩の米蔵から米を引き取るのであるが、夜中になってしまい御作事から大八車を借り、人足は召使が居る家から集めて運ばせた。穀問屋には、大人一日白米三合、七歳以下一合五勺。時の米相場に一〇〇文に付一合安で売るよう申し渡した。

白米では一度に一〇〇文まで、玄米では一〇日分を買うことが出来たが、一度に買うには代金がなく、日々の稼ぎ次第で買い求めたい者にはそのように渡し、売渡し穀高を通帳に記し、穀問屋が押切印をしておくこと。無償でお救米を受けられる者へは、家内人別に当てはめ一度に渡すようお願いがあった。

また八月二十日に、和田・長窪両宿より、飯米差支えに付きお払米願書が、上田藩に出され、藩では非常困窮の内の三〇俵ずつを払い出した。和田・長窪宿共に幕府領であっても、中山道の重要な宿場であるので融通したものであろう。

米穀改めが行なわれ、他所米を一切買入ることが出来なくなった穀屋もまた難渋となった。同五年七月、海野町で穀問屋を営んで

いた宮下良吉は、家業が成り立たなくなり穀問屋を辞めたいと届け出し、許されている。

米の流通が滞り、諸国では難儀しているものが多いことに、幕府は次のような触書を出した。

「諸国在々まで米価高値になり難儀している者が多いなか、領分では他国への米売買を差止めるところがあり融通できないでいる。御領・私領の別なく米穀融通差支えないように心得て米売買をすること。」これを受けて上田藩でも他所売りは自由となった。

穀問屋五人に、所持の米を難渋者たちに相場より下値で売り与え、また、お払い米・買入れ米等に骨折り働いたことに対して、藩から賞美として金二分ずつが与えられている。

三、町方へ申し渡されたこと

天保四年八月十二日、藩では町方へ米不足対策として次のようなことを申し付けた。

- 一 医師・旅あんま・茶師・角力・講釈師など、住んでいるものは別として、町へ逗留している者は立ち退かせること
- 一 菓子屋職人は置いてはならない。
- 一 茶屋は、蕎麦・饅頭（うんどん）・素麺だけにすること
- 一 米穀が高値になったからといって、他の物の値段を引き上げることをしてはならない。
- 一 米買入れ通帳が必要無くなった場合、町役所へ戻すこと

一 海野町・横町・鍛冶町は海野町の穀問屋で穀類を買うこと

一 米が無くなるまでは、買い求めるようなことはしないこと

続いて翌十四日には「町中の菓子屋は、穀物で製る菓子は指図があるまでは製ってはならない」と申し渡された。

また十六日には次の二項目が申し付けられ、飢饉の影響が大きくなっていることが分かる。

一 町中米麦所持している分は、五人組の中で成る丈融通し合い取り凌ぐようにすること。また粗末な飯や粥を食べ、食べ物を蓄え置くように心掛けること

一 在中殊の外物騒になつてきたので、自身番・辻番を厳重に勤め、町内で臨時の取締り人を申しつけること

続いて二十一日には、諸振舞い・恵比寿講・念仏講の禁止などの儉約事項が申し渡されている。日雇い稼ぎの者は、正五つ時（現在の八時頃）から、手元が見えなくなるまで働く事。雇う側での飲食の心配は無用の事。食事はなるべく飽飯（そはん）にする事。人足で出る場合の握飯も飽飯を持参する事、なども見える。

穀物で作る菓子は一切禁止であったが、翌五年二月には「小麦は融通出来るようになり、値段も下がってきたので、麦菓子に限り平年作っていた半数を許可する。」更に八月には、今年の稲作は出来が良さそうだということで、菓子屋に対し平年通りの米菓製造が許された。しかし、同七年の凶作でまたまた全面禁止となり、翌年十月やっと元通りの製造へと戻ったのである。

四、旅籠屋へ申し渡したこと

旅人は一夜のほか止宿させてはならないことは、前々から決められていたが、同四年米の値段が上がったことにより、次のことが申し渡された。

一 旅籠屋旅人一人に付き四合の積り

一 旅人・商人が泊まるに当たり、飯米が差し支えたときは、その泊まる者の住所氏名など詳細に書き出し、役所の判を貰ってから穀問屋へ持参し米を買い求めること。但し、一人に付き白米四合一 旅人・商人共、弁当は断ること。茶屋へなりとも行くようにと断ること

五、難渋者救済のこと

天保四年九月三日、藩では領民を上・中・下の三部に分け、それぞれの「御救い米取扱心得」を書面で申し渡した。

去る寅年取集め金を調達した者・召使有る者・産物改所改め方以上・町役人は上の部とし、鰥寡孤独（かんかこどく）・療疾（はいしつ）の類・極々窮民は下の部、その他は残らず中の部とする。

一 上の部 時の相場で、大人一日三合、七歳以下は一合五勺

一 中の部 銭一〇〇文に付一合安、代銭が払えない者は、手稼ぎの品でも引き換えることも出来る。

一 下の部 一人一斗五升ずつ、七歳以下はその半数をお救いに下さる。

但し、何れも米麦等分に取混ぜ取扱うこと

同七年十月、米価が上がり、稼ぎが少ないものは仕方なく、菜大根・葛藤の根などの雑物のみ食べ取凌いでいる者達を速やかに取り調べ差出すよう申渡し、その者へ錢一〇貫文宛藩から与えられた。

六、米穀改めのこと

天保四年八月十二日、町手代二人はそれぞれ別れて海野町と原町で米穀改めを行なった。海野町へは野原関左衛門が出向き、問屋代六左衛門・年寄嘉左衛門が立会い表通りを改めた。昼になり鮪屋兵右衛門へ申付け、茶漬と酒・肴三品を出させた。午後は横町を改め、七郎兵衛方で休息。ここでも酒に肴三品が出た。さらに鍛冶町を改め甚五郎方で酒が振舞われ、改めは済んだのである。

町内で米穀を所持している者はその量と、家内召使まで何人暮らしと、銘々が記載し帳面を提出した。

海野町・横町・鍛冶町 総人数メて一、七二六人

通帳数メて 三七四帳

七、自身番のこと

藩では世の中が物騒になってきたので町方の夜番を増やすよう申し付けた。その理由は「城下の取締りがきちんと行なわれると、毎日の生活や仕事に疲れていても枕を安くして眠ることができるので、不服を言う者はいないとおもうので、常回りの他、明け方の回りを

増やすように」というものであった。

町では土屋金五郎の下店を借り詰所とし、海野町・原町から二人ずつ出て勤めた。夜中に勤めた者が、当日の町内世話役・自身番・辻番の名前を確かめ書付にして差出した。

八、酒造りの制限について

天保四年九月、幕府から酒造りに付いて従来の三分の二減らし三分の一造るように触書が出された。もし隠しそれ以上に造った場合は、その者は勿論、その所の役人まで処罰を与えるというものであった。

上田藩ではそれ以前から、今年の酒造は一切禁止であった。その上他所酒を買い入れて商売をすることは、酒造屋に限らず小売の酒屋・茶屋でも堅く禁止されていた。しかし古酒の売り残りがあれば、神酒・祝い事・老人・病身者が酒で薬を服用する者には売り与えるように申付けられてもいた。

同九月四日、このところ酒屋共が酒に水を加えて商売している者がいると聞いたので、元通りに売るように、との申し達しがあった。同五年八月、今年の稲作は良い方へ向いているということで酒造り三分の一を許可したが、同七年には、また全面禁止となった。酒造差し止めの際には、藩役人立会いのもと、残っている酒の量を調べ、酒樽へ封印をした。空樽へも、隠して造ることが出来ないように封印している。

九、雨乞いのこと

天保二年七月十六日、早魃につき、雨乞いをするよう藩から申し付けられた。四嶽・大星・八幡などで、町ごとに行なっている。十七日には、蛭沢川そばの嶋屋半弥前に水溜め桶が出され、万一の火災にも備えている。

夜回りなども人数を増やした。ところが老人ばかりが出るので、事が起こった際には役に立たないと、老人では無い者を出すように注意されている。

一〇、季候順次・五穀豊熟の祈祷

天保四年も暮れの十二月になり、藩では家中・領民全てに祈祷を仰せ付けた。寒中にもかかわらず、陽気勝りで雪も積もらず、このままでは来年の麦作がどのようになるかも計りがたく、土用になっても陰気となり、気温も上がらず、また凶作にでもなればと心が痛むばかりである。しかしながら季候は人力ではどうすることも出来ないことであるので、天地神明の加護を祈るほかは無い。

日を選んで大宮・八幡・稲荷鎮守・真田村白山等において、来年の季氣候順次と五穀豊熟の祈祷を行なう。

町々でも処々の氏神へ銘々が誠心を持って祈祷するように、と仰せ付けられた。海野町では、二十一日に大宮へ祈祷をお願いした。町役人は麻袴、袴御免の格式を持つ者以上は袴を着用し、その他の者は羽織を着て、判頭が五人組の面々を引き連れ参詣した。大宮へ

の供物は、米一升・するめ二把・初穂百疋であった。幟が建てられ、その日は町中が休日となった。藩から両町へ神酒が一樽（一斗入り）ずつ用意され、参詣の上、頂戴した。

同七年十二月にも、大宮・八幡において、陽気祭と五穀成就の祈祷が行なわれ、永住者から止宿者に至るまで、祈祷札が配られた。

一一、蕨餅・蕨粉製造方法

飢饉で食料が不足し、食べられる物は全て採りつくされた状況を憂慮した藩では、普段は食べない物でも、少しでも食料の足しにするべく作り方を領民に伝えた。

蕨餅製法 蕨を刻んで日に干し、石臼で挽き一番粉を採る。残りを

一晩水に浸し、揉みだし、沈んだものを日に干し粉を採る。

この粉を、餅米と混ぜ蕨餅にする。蕨粉一升到小麦粉五合・蕨粉五合を用い蕎麦の代わりに用いる。

蕨餅製法 蕨の根を良く洗い、臼で搗き、水で揉みだし、一昼夜休め、上水をこぼし、沈んだ白水を澄むまで置き、桶底の粉を採る。

一二、疫病処方

「享保の飢饉」の後は疫病が流行したり、雑食の毒にあたり患い難儀したものが多く出たという。その際薬方の書付を村々へ知らしめて置いたが、今回の飢饉にも役立てるように再び触書が出された。

○ 流行病には大粒の黒大豆をよく煎り、甘草と水で煎じて飲めば良い。

○ 茗荷の根と葉をつき砕いて、汁を飲む。

○ 牛蒡の汁を搾り、茶碗に半分ずつ二度飲む。

○ 桑の葉を一握りほど火であぶり、煎じて飲み、汗をかけば良い。

○ 一切の食べ物に毒にあたり苦しむときは、煎った塩を嘗めるか、ぬるま湯で溶かして飲むと良い。

○ 苦参を水で良く煎じ、飲み、食べ物を吐き出すこと。

○ 大麦粉を香ばしく煎り、白湯で度々飲む。

この他に、多くの病に対する処方、出典と共に書かれている。

一三、馬士難渋

天保四年八月十四日、『本陣日記』に次の記載が見える。

「当時馬士難渋ニ付、耆人ニ付白米五升宛救米遣ス、但拾八人也」

これにより、海野町には町で抱えていた馬士が一八人居たこと、その馬士たち一人に付き救米五升ずつを町として与えたことが分かる。

同年十二月には、何人かの町人が賞美されたり町役人に任命されている。その中の海野町年寄小野沢六左衛門養子亀市について見ると、「養父六左衛門は、馬士たちが食料に差支え、その上馬飼料にも困っているので、馬士たちに藁などを密かに配り、その以前も難渋の者へ米など密かに施し、その行いは誠に奇特である。その行いを賞美するため、亀市へ苗字袴を許し、上判を申付ける。」という

ものである。これは六左衛門の善行に対する賞美であったが、六左衛門はすでに全ての格式を持っていたので、養子の亀市に格式が与えられている。

同六年四月にも、飢饉で米などを手に入れることが難しいときに、米の買い入れに尽力したり、難渋の者たちに金子を施したりと、奇特な行いに対し町人一人が賞詞されている。中には上田宿の馬士たちへ金一兩を施した田町の半右衛門もいた。

同八年には原町源太郎が、馬士たちへ金二朱ずつを与えている。宿場にとっては、馬士および馬の確保は大切なことであった。飢饉に人の食料もままならない上、馬の飼料も足りない状況に手を差伸べた町人たちを、藩は格式を与え賞美した。

* *

『本陣日記』には、何年にも渡った天保飢饉に対する、上田藩及び町人たちの様々な対策が記載されている。藩では米を緊急に出し、町人に安く売り、極難渋者には無償であたえた。草木を食物にこしらえる方法、食合わせのいけない物、毒にあたったときの薬などが書かれた『救荒鄙論』を町ごとに配つてもいる。

町人同志が助け合いながら、何とか飢饉を乗り越えようとしている姿も見え、大変な飢饉にもかかわらず、上田藩では一人も餓死者が出なかったと言われることもうなずける。

天保期上田藩における盗難

天保元年（一八三〇）四月二十日、姫路城主酒井雅楽頭忠実二男であった忠優は、上田松平家の養子となり六代目藩主になった。

その年からしばらく経った天保四年から七年にわたって全国的な飢饉となり上田藩も例外ではなかった。

忠優は苦しい藩政の中ではあっても、領民のために救米を施したり、年貢増徴のためでなく凶作のための検見を行なうなどの方策をとり一人も餓死者を出さなかったといわれる。

同元年から十年まで、天保期の上田海野町『本陣日記』および上田原町『問屋日記』から、盗難・盗賊の記録を拾い出し、飢饉との関係を探ってみた。

飢饉が始る前までの盗難件数はとりわけ多くは無いが、同四年後半から年を経るに従い倍増している。盗品を見ると着類の件数が圧倒的に多く、次に金銭である。金銭は、掛硯箱や帳箱ごと盗み捕り、邪魔な箱は、お宮の裏・畑・川原などに捨てられていたと記されている。

また着類は、晴れ着・普段着・下着・帯等々盗まれている。特に呉服店での盗品が多い。天保期の盗難件数および盗難品をまとめた

ものが「表1」である。

その他の品物五七品のなかには、傘一五五本・下駄八〇足・脇差・高価な簪かんざしなどがみられ、食べ物たべものは米・麦・味噌・青豆と多彩である。

（表1） 天保期における盗難事件数および盗難品

	件数	着類	金銭	夜具	煙草入	風呂敷	その他
天保元年	3						
2年	1						
3年	4						
4年	5	13	2	1		2	2
5年	5	22	1	1	2	1	7
6年	13	5	11	3	1	1	1
7年	24	23	9		5	5	11
8年	40	35	20	1	3	2	20
9年	16	41	1	1	8	3	15
10年	10	23			1	1	1
合計	121	162	44	7	20	15	57

天保期『本陣日記』に記載された盗難届は二九件ある。その中から六件を紹介する。

天保四年十二月十二日

海野町源兵衛方へ昨夜中盗賊が忍び入り、売り溜め銭箱（売り上

げ金の錢をいれて置く箱)一つと、その中に入れて置いていた錢六貫文程が盗まれた。早速に調べたところ、錢箱は御旅屋(おたや。伊勢の御師などが泊まった宿駅の旅宿)の裏にある田の中に捨ててあったので取っておいた、という知らせがあった。

同五年七月七日

昨六日の夜、横町弥四郎方へ、表戸を明けて盗賊が忍び入り、古^{ひとも}單物・古帯などあわせて一一品が盗まれた。

同六年七月一日

今晚七ツ時(午前四時)紺屋町油屋清助が起きて見たところ、表の戸が開いていて、店の小簞笥に入れて置いていた金二両余りと錢箱に入れて置いていた錢四貫文程が盗まれていた。小簞笥と錢箱は、八幡前の畑に捨ててあった。

同八年正月十日

海野町滝澤義兵衛出店富五郎方へ夜八ツ時過ぎ(二時頃)に表の戸を外して盗賊が忍び入り次の品々が盗まれた。

金 二両 (これは掛硯箱にいれて置いたもの)

脇差一腰

同 一腰

紙入れ一つ(中に壱両が入っていた)

煙草入一つ

きせる一本

同八年正月二十六日

明八ツ時過ぎ(二時頃)横町の助市方へ、表の戸を外して盗賊が

忍び入り、唐草四布蒲団一枚・小紋の着物一着・帯地二筋のほかに、錢箱に錢三貫文・金二両三分一朱の入った掛硯箱ごと盗まれた。錢箱は願行寺の裏に、掛硯箱は新長屋道祖神うしろに捨ててあった、と記されている。

同八年七月

二十三日

海野町中嶋秀

藏方へ、一昨日

二十一日の夜四

ツ半時頃(十一

時)表の方の垣

根を乗り越えて

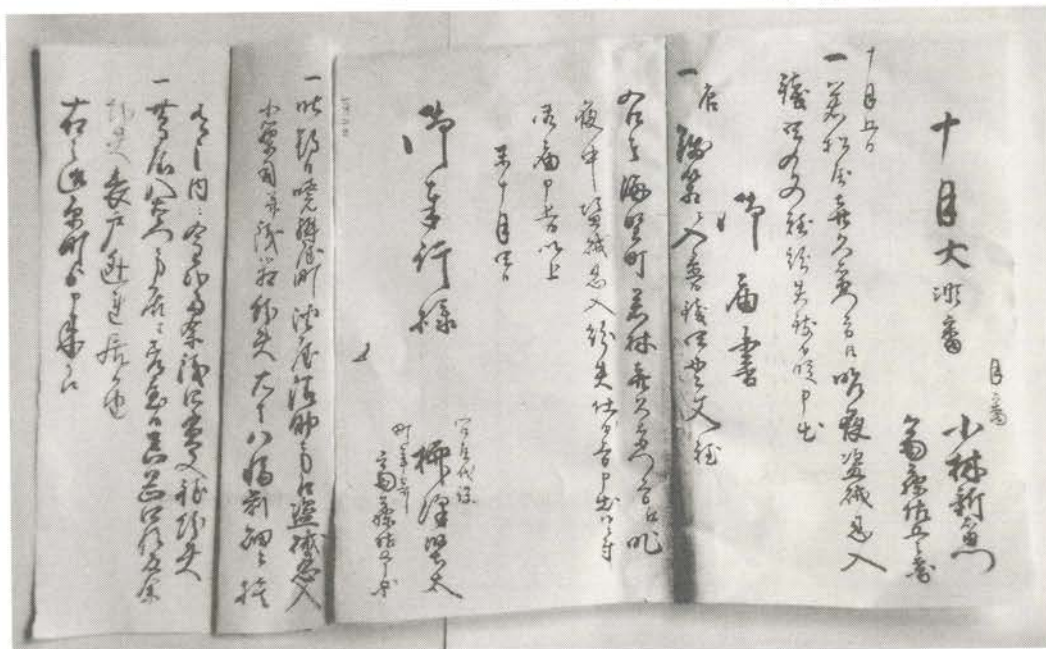
盗賊が忍び入り、

煎餅形一つ・古

紺^{あざ}縋^き單物一つ・

古^{あざ}浅^き黃單物一つ

が盗まれた。



(「本陣日記」の一部)

天保期『問屋日記』における盗難の記載は百件以上に及ぶ。その中から四件を紹介する。

天保四年六月二十四日

木町伝蔵方で、着類一九品・金一両三分二朱・銭三貫八〇〇文余・傘一五〇本・白皮下駄緒八〇足と大量の品々が盗まれた。

この大難があつてから、自身番・辻番を嚴重に勤めるように藩から度々沙汰が出され、町奉行からも、木町伝蔵及び盗難に遭つた者へ、用心するようにと申達しがあつた。

同六年十二月十一日

原町滝沢友次郎方店で、掛硯箱に入れて置いた金一四兩一朱が盗まれた。朝七ツ時前（四時近く）他の人から知らせてもらい調べたところ、戸などに疵も無く外れていたので、表の戸を開けたままにしておいたことに気づいた。掛硯箱は、新小路矢出沢川に捨ててあつた。

同七年四月二十八日

奈良屋定吉の店へ、夜表戸の掛金を外して忍び入り、店の品を大量に盗んだ一例である。

小倉帯地四〇筋余

羽織紐 五〇筋余

手拭絞り一五反余、内半分ほど切々

襦袢地絞り二〇反余

絹打紐 二〇反余、内一五反ほど切々

小倉並びに皮煙草入五ツ

同年十一月十四日

柳町の米屋栄三郎倅十作が、紺屋町の薬湯へ行き、風呂に入っている間に、小倉帯・弁慶嶋前掛け・黒皮煙草入（木の筒を添えて）・足袋・銀流しきせるが盗まれ、その代わりに綿入れが一つ置いてあつた、という。

(表2) 盗難に遭った場所

	店	先	止	宿	自	宅	寺	薬	湯	未	遂	その他	合	計
天保元年	2		1		2		1						6	
2年			1		1								2	
3年	4		2										6	
4年	4				1					2			7	
5年	6				2			1		4			13	
6年	8				5								13	
7年	9				6		1	3		7		2	28	
8年	20		2		10		3	1		6		1	42	
9年	4		1		5			5					15	
10年	5												5	
合	62		7		32		5	10		19		3	138	

着類を盗むときは、風呂敷も一緒に盗んでおり、それに包んで背

負って逃げたのであろう。

特異な盗品では、掛けておいた婚礼用暖簾・どうこ・松本賄所印書・判取帳などがあり、また三升鰯釜と白米三合を小風呂敷と共に盗まれ、麦粉三升を黒飯櫃に入れ盗まれた例もある。水晶の数珠・縮緬の衣などがお寺で盗まれた一件もみえる。

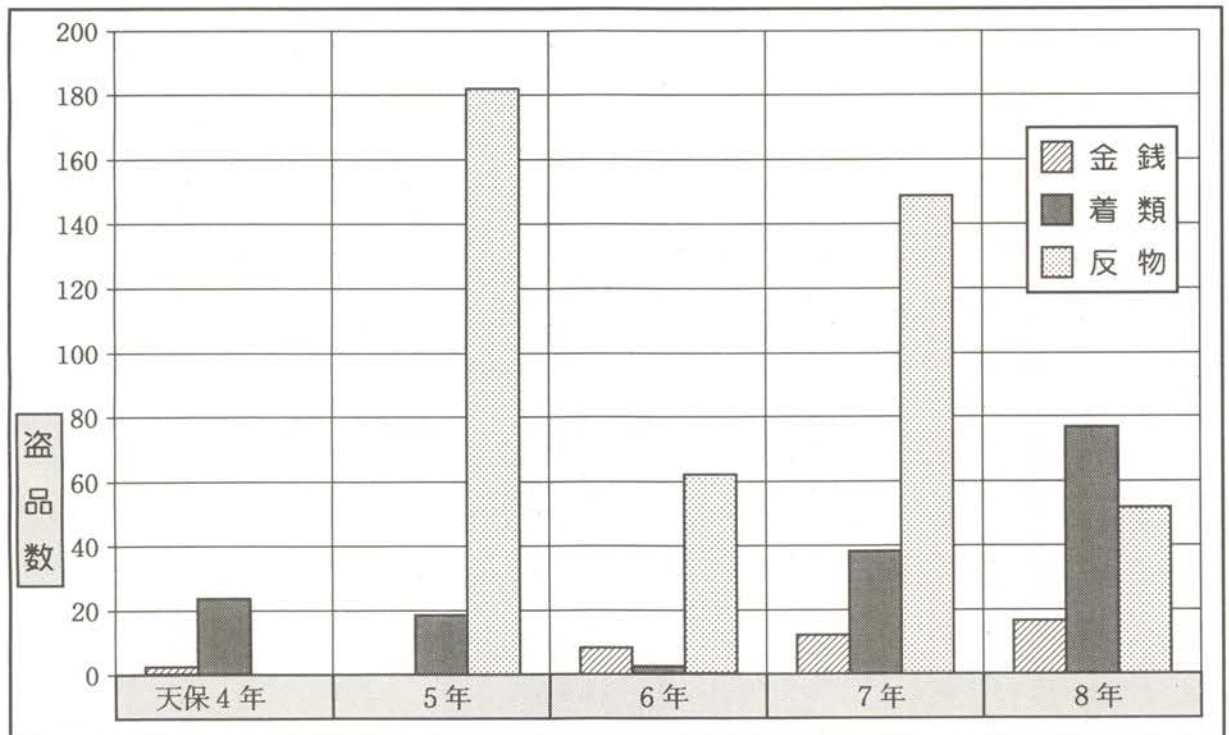
家の者が物音で目を覚まし、見に行くと、梯子を掛けたまま逃げて去り、その置いて逃げた梯子に名前が記されていたことから、梯子も盗んだものであったという例もある。

盗賊取締りについて、天保八年三月十六日に触が出された。

在町役人・五人組は互いに協力して盗賊・博奕などの悪事をする者を見つけたら早々に訴え出すこと。取り押さえて差し出したとき、死罪以上の盗賊を捕り押さえ差し出した者へは、二貫五〇〇文、同じく訴え出た者へは、二貫文の褒美を下さる、という内容であった。藩から出された触により見回りを増やしたり、家々が防犯に注意を向けるようになったこともあってか、未遂に終わった事件も多く見られる。

長い年月の間飢饉に苦しめられた人々の中には、背に腹は変えられぬという行動が、盗む行為になってしまった者もいたのであろう。

着類・金銭・反物の盗品数の比較



郷土資料に見る天変地異

上田図書館所蔵の「花月文庫」・「藤廬文庫」などの貴重資料の中には、今回取り上げた『天保鐘愁』のほかにも、享保十五年上田城下町の大火・寛保二年の洪水・天明の飢饉・天明三年浅間山大噴火・弘化四年善光寺地震等の災害を記録したものが七冊ある。天明三年浅間山大噴火に関する書が大半を占めるが、記載事項にはそれぞれ特色も見られる。以下、これら七冊を紹介する。

『享保以後上田町天変地災記』

秋葉及稲荷祠勧請記

本書は「花月文庫」所蔵の写本で、『日本教育史資料抄』『藤の下露』『上田学校沿革』『享保以後上田町天変地災記・秋葉及稲荷祠勧請記』の合本である。天変地異の記録である『享保以後上田町天変地災記・秋葉及稲荷祠勧請記』は僅か二二ページからなり、書写の時期、筆者は不明である。記述は、享保十五年（一七三〇）横町・海野町・原町の一二〇戸を焼失した大火に始まる。

享保十五年十月八日、横町庄五郎宅より出火した火災は、海野町・原町の大半を焼失し、上田初めての一大事で、町中途方にくれ、先々の生活を案じていたところ、殿様が久保御林から松木一万本を下さり、その慈悲により家作りができた。さらに御救米三百俵も与えられた。また、同年十二月二十五日には御館より出火、御殿が残ら

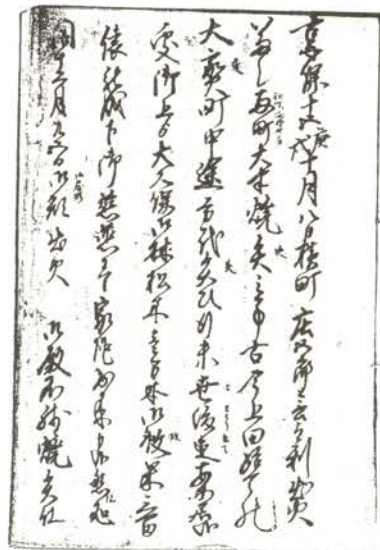
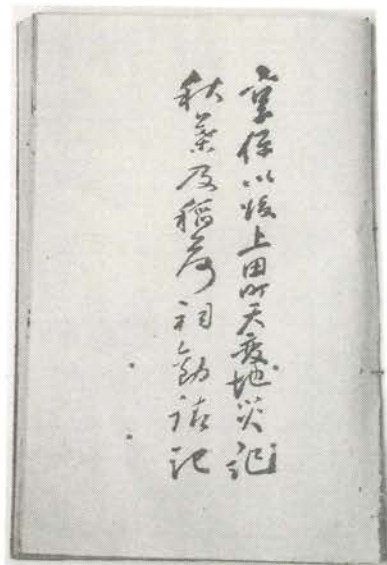
ず焼失した。

この相次ぐ大火により、人々は氣落ちし、家業にも身が入らず、年越しも簡単に済ませた。そして、度重なる火災は日頃の信心の薄さに神が咎めを与えたと思ひ、これから先災難から逃れるために、火防の神である遠州秋葉大権現を信奉し、講を結成して毎年参詣するようにになった。

寛保二年（一七四二）八月の大洪水は、これまた古今の一大事で、流死人、山林家屋の流失は言語に絶した。国中の嘆きは深く、いよいよ神のご加護を祈り信心するようになった。

さらに宝暦四年（一七五四）一月二十五日、常田村助六宅より出火、一六戸を焼失する火災があり、やがて、秋葉大権現を大法師（大星神社）に勧請することになる。そのいきさつが記録されている。

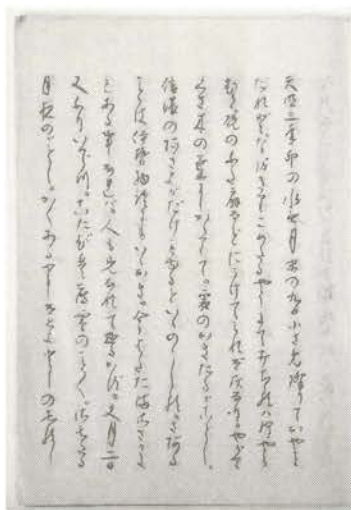
後半は、「寛保二年満水大變物語」として上田地方の村々の被害状況を記している。



『信州浅間焼之事』

この書は、天明三年（一七八三）の浅間山噴火の後、同年の冬に播磨清絢が写したものである。天明三年の浅間山の状態（六月の末より七月八日の大噴火まで）とその後の様子が書かれている。

六月の末より灰が降り、草木の葉は霜の降ったようであった。七



月五日の午後、黒雲がたなびき、俄かに黄昏て砂が降り、雷が鳴り止まない状態が毎日続いた。七月七日昼頃、俄かに日暮れて神鳴が渡り、振動し硫黄の臭いが漂い常闇の夜となった。翌八日は、浅間山の北の方より抜け、大きな火が五〜七尋（一尋は一八〇cm）上がり飛んだ。家の柱は折れ壁は落ち、人々は真つ黒で、田代かきのようにであった。軽井沢・追分は、石が降り、屋根が抜け、家の中に石が積もった、という。

七月九日前橋へ行った人が逃げ帰り、利根川の様子を話した。

「大木の根が抜けて流れ、大石・家も流れ水の底に沈み、川の水は硯の色であった。子供一人を抱き、一人を背負った女が流されてきたので、助けようとして、さで綱を差し出した。その綱に子供を入れ助けることが出来た。母親も助けようとしたが、大石や家と共に流されてしまった。また、若い男が老いた母親と幼き子供二人と共に流されて来た。子を捨て母を川中から助けようとすると、母親が「我を捨て、子を助けよ」と叫ぶ。二人の子を岸の上に投げ、母親の後を慕い、川の中に戻る。ようやく母親も助けることが出来た。その志が天に通じ、周りの者も喜び生きた心地を味わい、少し元気が出た、という場面が書かれている。

溶岩の流出の場所は、助けようと思っても熱くて近寄れない。「水で木が燃える」と表現している。坂本・安中方面から中山道を南に溶岩が流れていった。大木に火が移り焼け広がり、石・泥の高さは七、八尋程であった。この噴火で降った灰・砂・石を取り集めれば浅間山より高くなるように思える。全く知らない世界に行った気持ちである、といっている。

噴火の有様が詳細に書かれている。また、泥に埋もれ火に焼かれ水に流され、数千人が死に、牛馬も多数死んだことなど、悲惨な被害の様子も具体的に書かれている。信州より上州の被害の大きいことがわかる。

この後、江戸時代の三大飢饉といわれる天明の飢饉へと続き、苦難な生活となっていく。

『浅間騒動記』



資料画像
にリンク

これは、天保五年申年永井義遊が記した写本である。

天明三卯年の夏より、平穏な山が噴火の気配である綿をほかしたような煙が立ち上り、地響きと共に峰より火が燃え上がり、震動することがおびたしくなった。近辺の者たちは、どうしたことかと不安におののき、手に汗を握り、ただひたすら神仏の加護を念じて、噴火の鎮静を祈った。されど、噴火は日増しに多くなり、前代未聞の大噴火となった。

煙は空一面を覆い、火の玉は八方に飛び散り、黒雲天空を覆ってその合間に稲妻の如くひかり、大きい焼け石が飛び交い、地に落ちて火の石砕けてまた火玉となる。往来にはもう旅人も無く、軽井沢宿・追分・小田井その外近辺の者たちは自分で歩ける限り、夜中六里も七里も逃げ惑う。だれかれと言うことも無いままに、道路に倒れこむ者も出た。夜中で食事も出来ず、老人・子供は精力井尽きて倒れ、死に至る者も出る始末であった。命からがら知人や縁者を訪ね行き一飯にあずかった。

軽井沢宿の茅葺家に火が燃え移り宿の半分が消失してしまった。消火に当たる者も無く、家財・財宝をそのままに捨てて逃げ去り、その跡へは盗賊が入り込み、金銀財宝を盗み取った。

ろうそくや行灯をともして、諸寺・諸山で護摩をたき念仏を唱えた。諸国が凶作になり、江戸表も米に行き詰まり、上州でも信州か

らの米が入ってこなくなり、露の命をつなぐため致し方なく徒党を組んで一揆を起こした者もいた。一揆勢は小諸城下へどんどん押寄せ、上田領笹井・伊勢山・横尾・真田等まで乱入し火をつけていった。夜中千曲川を越そうとして水に溺れる者もあった。

浅間山麓裏側、北上州鎌原村は残らず押し埋められた。この村、家数二百軒余、人数六百七十人余、漸く九十人ばかり生き残り、後は皆泥の中に押し流された。その外、村村泥にて押し流された。その場所四十二ヶ村、人馬流死何万という。

『天明三年浅間焼及騒動記』



資料画像
にリンク

この書物は『信濃国浅間嶽之記』と『天明騒動記』の合本である。

『信濃国浅間嶽之記』は天明三年（一七八三）の浅間山大噴火の様子を、焼け始めから焼け崩れに至るまでの詳細、山が鳴動押出し吾妻川流域村々の流死人馬、流家などの被災状況を絵図と数値で示している。幕府の災害復旧体制について、信州・上州・武州七〇三ヶ村にわたる灰・砂・泥・火石・用水の悪水除など現地の復旧対策に当たった普請関係役人六〇人の名前、各々の仕事内容、受け持ち区域と旅宿が記されている。同四年正月九日には、普請工事の出来栄を見分に柳生主膳正他一九名が到着。更に普請手伝の熊本藩主細川越中守家臣の、副奉行で現地熊本藩元締役であった白杉少助他の名

前も見える。熊本藩は幕命により普請費用一〇万両を負担した。

この書は文政九年（一八二六）沓掛宿土佐氏所蔵の『大変記録』を借用して書き写したと記しているが、筆写した人の氏名も原本の著者名も不明である。

人々が世相を詠んだ歌が文末に載っていて、心情が吐露されている。

浅間^{（浅土）}しやふしより高き穀相場六斗^{（六連）}の辻にまよひこそすれ

江戸の浦にうち出見れば国の内のこめの高きにいきはきれつ^{（息）}

土を動かし噴火する浅間の煙は陽射しを覆い、土が冷え陽気不順になり、噴火する硫黄灰が諸作物や草木を枯らし、梨や林檎、柿の花が九月に咲いたり、異常現象の数々が示されている。浅間噴火前後の穀相場が毎月ごと記されているが、同三年七月と同四年二月とは約三倍の高値になっている。「村々は飢饉で飢人餓死者その数知れず、郡内関東筋常の食物の他藁の粉、山の方にては木の根草の根までも掘り尽し、食事金銭続き難く日本四拾貳国の飢饉となった」と書いている。

『天明騒動記』は同三年浅間山大焼けによる影響で、米価の高騰など世情が騒然となり、上州での打ち毀しに始まり、信州へなだれ込んだ一揆勢の様子が書かれている。信州小諸領羽毛山村（現東御市）西之入伊藤太が安政元年（一八五四）書いたとあるが、内容は書き写したものと思われる。

序文に次のように書かれている。「天明癸卯の初秋、信濃国浅間山多に焼け上がり、六ヶ国の妨げとなった。その頃都に世を逃れ隠れていた老人が信濃国に行き、田舎の風俗有様を見ようと先ず諏訪の七不思議を尋ねた。諏訪大明神に参詣し湖の風情に感銘して、この夜はここに泊ろうと、枕に寄り添いしばらく眠ると、白髪の老人が鳩杖にすがり立っていた。その老人が漸をしたことである。」

目次には『旅枕時雨の実記』として次の八編がある。

- ・騒動乱集の事
- ・妙義山天狗会の事
- ・信州潰はじめの事
- ・騒動賊徒と変わる事
- ・小諸評定の事
- ・上田評定の事
- ・賊盗滅亡の事
- ・十月五日夜村々騒事

はじめの七編は天明騒動の詳細である。一揆勢の足取り、打ち毀しに遭った家の名前、各藩の対応策、豪農・豪商などの動揺と一揆勢が消滅していく過程が書かれている。

終わりの編「十月五日夜村々騒事」は、誰が言い出したか分からない流布によって、佐久・小県をはじめ広い地域の人々が大騒ぎをしたという一件である。「甲州より騒動起こり、その勢一万余人にて佐久郡川上よりはじめ、村々残らず焼き払い来る」と五日暮れ方村々に触れ回った。各村では慌てて用心のための人を集め、加勢のため松明をふり立て押し出ると、これを甲州勢と見て対抗し、よく見れば味方であった。そのように各村ではお互いを甲州勢と思ひ込み、争ってみればやはり味方であったと言う。

いろいろな風聞があったこの夜の騒ぎは、前代未聞のことであった。後書では、この本には誤りや落ちがある、とも断っている。

『信濃ノ國浅間山大焼騒動記』

この本は写本で、「花月文庫」に収蔵されている。金子玄岱嘉成が、文政九年（一八二六）十九歳の時に写しておいたものを、六八歳になり改めて写し直したもので、次の五項目から成っている。

- 一 世上の奢り、華麗なる次第
- 一 浅間山大焼け、凶作の事
- 一 上州・信州騒動の事並びに打毀し焼払いの村家の事
- 一 米価値段高値困窮の事
- 一 御公儀より、凶年に付き度々御触書の写

中には次のような記載もある。

「天明三年浅間山大噴火が起きる以前の世相は、貧富の差など殆どないほどに、人々は自由自在に楽しげに暮らしていた。しかし、心ある人は、月の満つれば欠ける、という例えがあるように、用心するよう戒めたが、諸人の望みは尽きることなく、世の奢りは益々止むことを知らなかった。

時は天明三年となった。麦秋となり取入れをしたが、大麦・小麦共に不作で、平均して五、六分の収穫でしかなかった。しかし、春に植えた稲の苗は、初めは不良の育ちであったが、段々良く生い立ち、人々に勇気を与えていた。ところが七月になり、浅間山大焼けとなり、近国近在大変事となった。」

また、小諸城主牧野遠江守が、帰国の途中噴火に遭遇した様子が、中間奉公に出ていて、藩主のお供をして帰ってきた人から聞いた話として記載されている。

「藩主の帰国にあたり、荷物は先に七月一日江戸屋敷を出、七日に噴火に遭った。石砂降ること夥しく、命が危なくなり、荷物を残らず切り落として、人馬はようやく逃げ去った。石砂の底に埋まった荷物は、同十四日に掘り出し、背負子で、杓掛宿まで送った。

一方、藩主は六日に江戸を立ち噴火に遭い、泥の雨が降り、竹木がなぎ倒され、通路は無くなり、逗留を余儀なくされてしまった。大雨で増水した安中川では、竹を調達し筏を拵え川越えしたりしながら、十六日夜漸く小諸へ帰国することができた。」

この本には、噴火の後、水野出羽守や久世大和守が出した触書の写しもある。あて先は「奏者番衆・寺社奉行衆・大目付」である。普請の竹・木・石はもちろん、必要な物資はなるべく下値にし、普請に差支えないよう、名主や地頭から村々へ申し渡すように、と配慮している。



『信濃国大地震大満水写』

上田図書館「花月文庫」郷土史料に分類所蔵されている写本である。表紙の題名は標記の通りであるが、実際は『諸国大地震』『弘化四末三月廿四日夜四ツ時善光寺近鄰大地震』『浅間焼出大變記』の三冊が合本されていた。

『諸国大地震』

寛永十年（一六三三）関東地震から嘉永七年（一八五四）までの諸国で起きた大地震を列記してある。中でも弘化四年（一八四七）信州大地震・嘉永七年勢州地震・同年東海道大地震については、特に詳しく記載されている。

信州大地震 中野陣屋役人高木清左衛門が、幕府勘定所に宛てた届書き三通、中之条陣屋役人川上金之助が勘定所に宛てた届書き、周囲の私領領土から幕府に宛てた届書きなどが写されている。地震が起きたときの様子、被災状況などの詳細が分かる。また、犀川が山抜け土砂で埋もれ、塞き止められた水が一気に流れ、大洪水になったことが、報告されている。

更に拝借金二五〇〇両の願いも出されている。

勢州地震 京・奈良・福井などの広範囲の被災状況が記載されている。

東海道大地震 浜辺の村々は、津波の被害が出て、死人怪我多数出たという。「甲州府中・信州松本右過半潰れ、同国鰍沢大半潰れ、出火にて焼失、信州松代・美濃大垣・加納岐阜、此の辺大あれ」の記載も見え、被害は九州あたりも含まれる広範囲

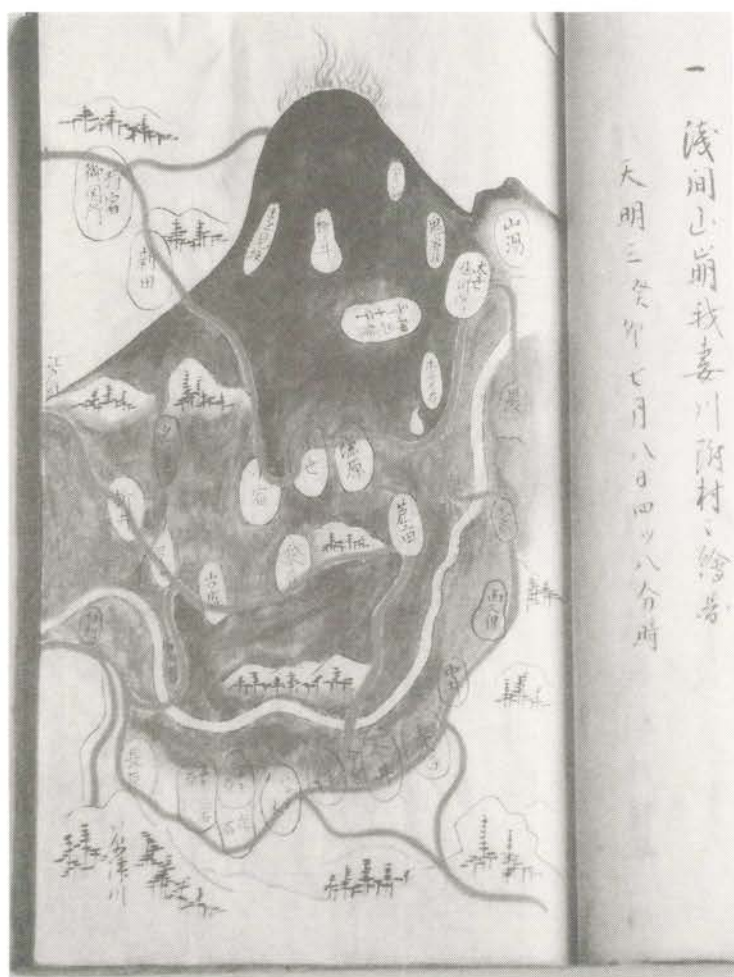
であった。

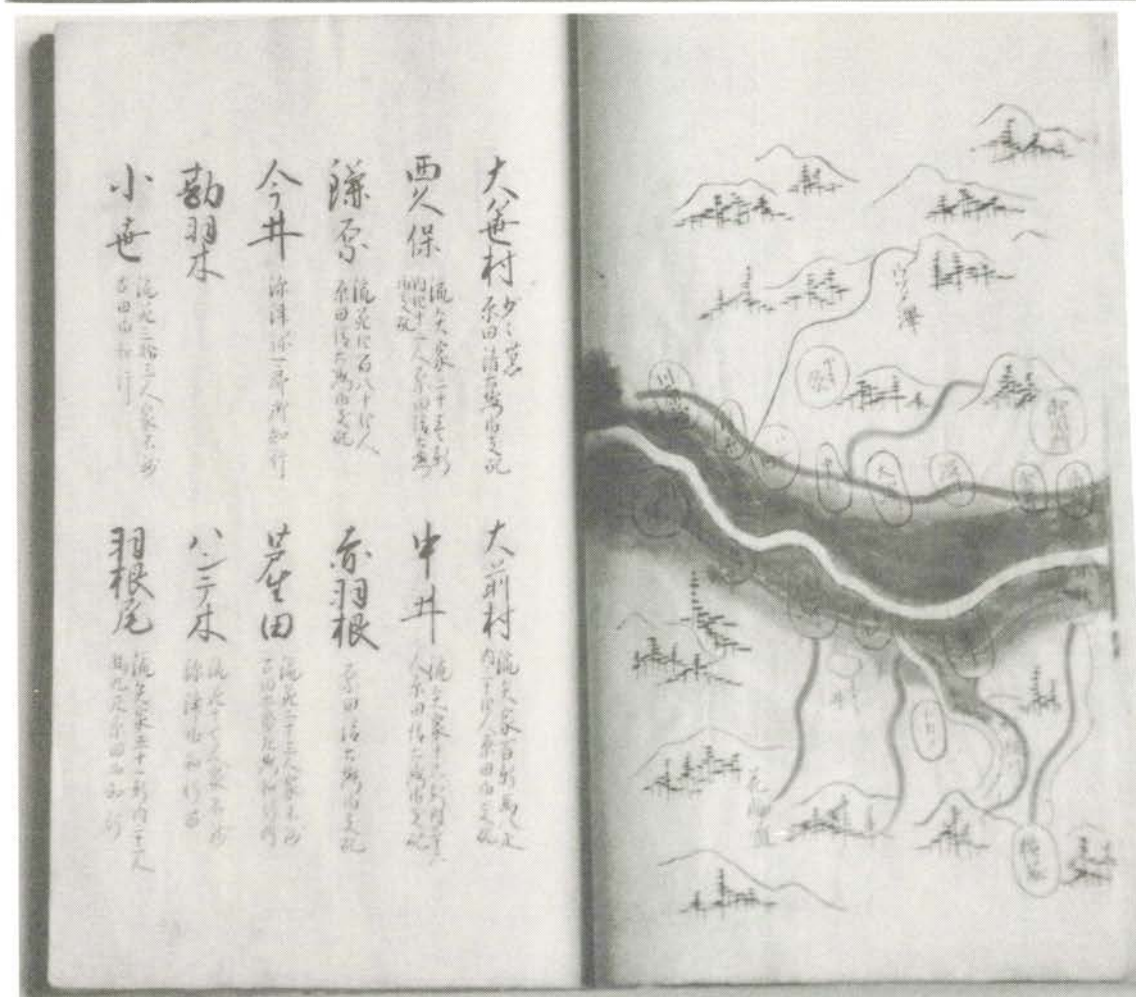
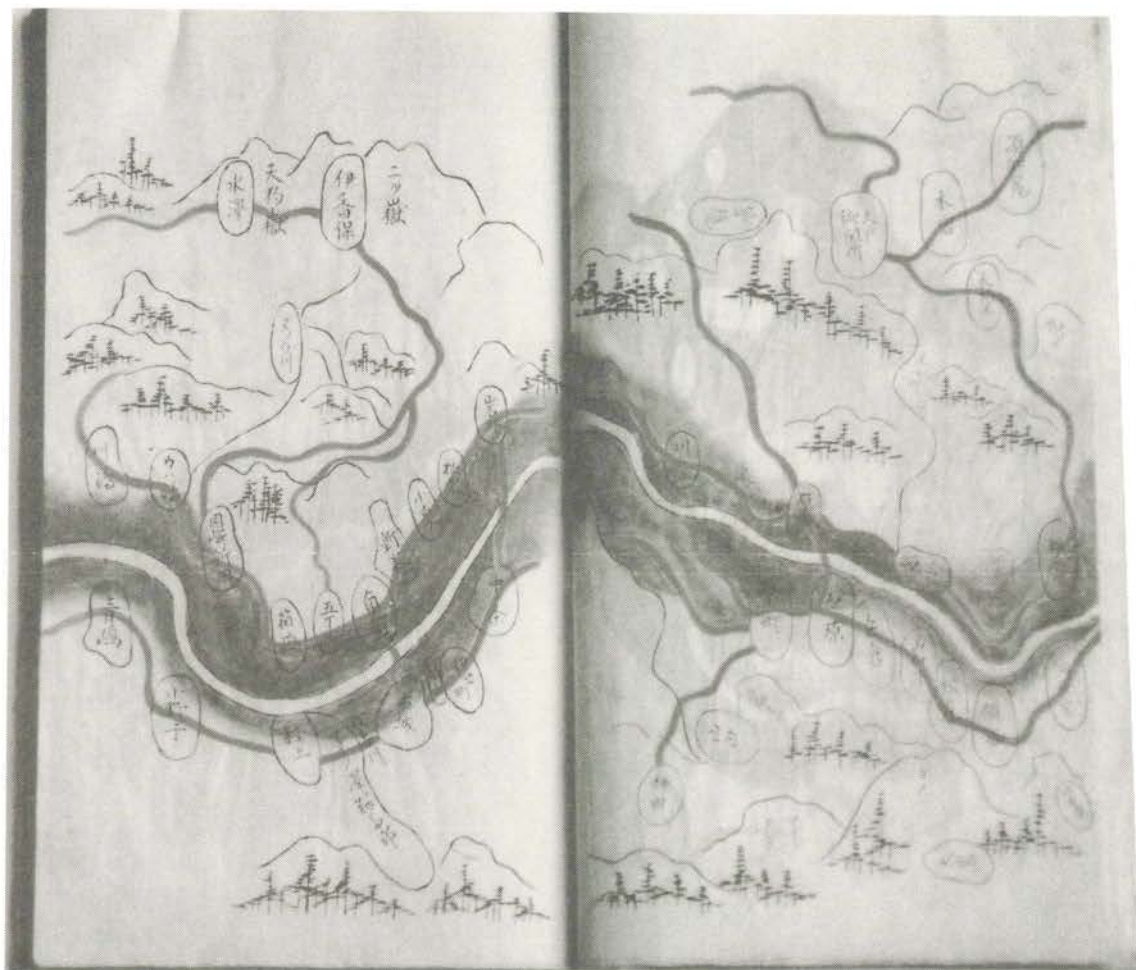
『弘化四末三月廿四夜四ツ時善光寺近鄰大地震』

この地震は、三月二十四日より四月二十四日までの間に九二四回ほど揺れたという。各村々の潰れ家・半潰れ・死人・怪我人などの他に、死牛馬の記載もある。飯山藩主本多豊後守が幕府に届けた「城内並びに家中城下町」破損状況が詳しい。

『浅間焼出大變記』

天明三年以前の浅間山の謂れなどに始まり、同三年の大噴火と、それによって起きた各村々の被災状況が克明に記されている。特に宿場旅籠役人からの届書きが多くを占める。米相場の記載もある。





『信濃史談』

この本は、飯島保作（号、花月・雪堂）が、興味を持った歴史的
事項を、本から抜き書きし、また新聞・雑誌の切抜きなどを集め、冊
子にしたものである。

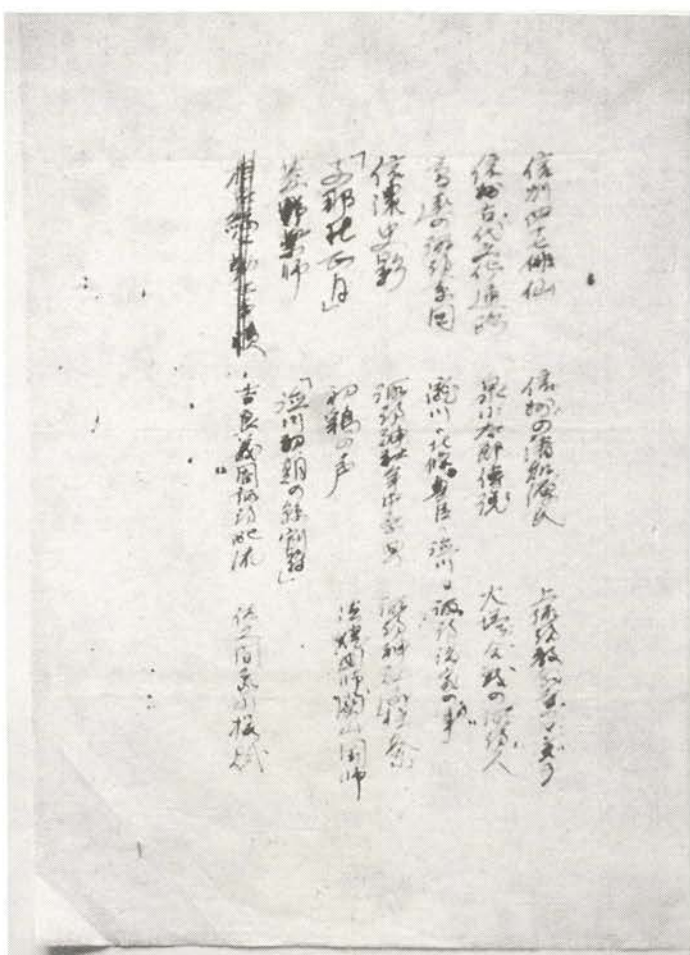
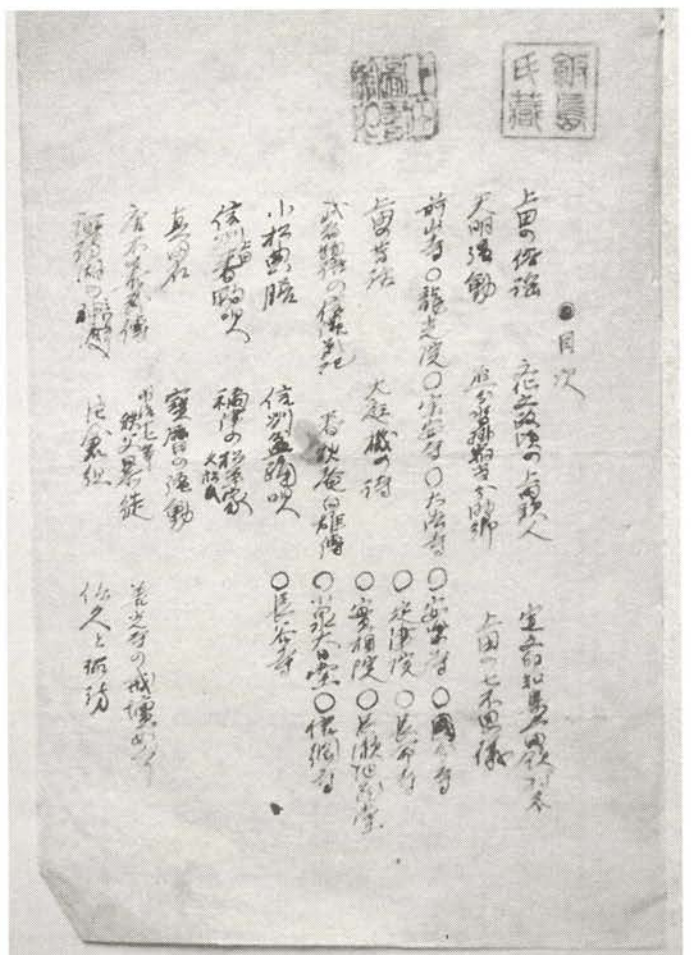
目次は四十数項目からなっている。その中から大正五年（一九一
六）上田郷友会月報掲載の「天明の東信騒動」を取上げた。

天明三年（一七八三）は、氣候不順で五穀稔らず、米価高騰し、
各地飢饉に迫り惨憺たる光景、実に稀有の年であった。これを「天
明の飢饉」と言う。

凶年の常である騒動が、上州磯部・安中・板鼻辺りに起こった。

一揆は横川の関を越え、軽井沢から沓掛・追分などを脅かし、岩村
田領に入り暴れまわった。更に野沢辺りまで行き引き返し、北に転
じて小諸領を通過し、上田領に入った。ここでも暴行を思いのまま
にしようとしたが、上
田藩の捕吏に阻まれ、
暴徒は四方に離散し、
ようやく鎮静した。

この騒動の顛末は、
『北佐久郡誌』に詳し
く記されている、とし
てその一文も載せてい
る。



西 暦	和 暦	記 事	分 類
1837	天保 8	<p>◆ 5月ころより曇り日続き冷風吹き、大雨洪水も加わり損耗 5 万2000石以上の大凶作となる</p> <p>◆ 藩、「救荒養生法」を出し、菜、乾菜の代用・粉末の製法・大麦挽き割りの代用・解毒法・毒草の類・藁餅の製法・養生の事を教示する</p> <p>◆ 2月、小泉組で藍瓶改めが実施される</p> <p>◆ 2月、藩、去年秋の凶作のため米穀払底につき、海野町土屋嘉右衛門、原町島田万助、塩入喜三郎の3人に手当米買入御用達を命じる</p> <p>◆ 6月、浦野組仁古田村が愛宕山において雨乞いを行うため、木曾御岳山へ御神水を貰いに行く（同10年7月7日にも雨乞い）</p>	<p>凶作</p> <p>藁餅製法</p> <p>藍瓶改 手当米用達</p> <p>雨乞い</p>
1838	9	<p>◆ 6月19日、竹内善吾、越後米 5 ～600俵の買入に越後に出向き奔走する</p> <p>◆ この年、房山村土屋文吉、秋蚕種をつくりだすと伝える。このころ秋蚕の飼育が始まる</p> <p>◆ 4月、松平忠優、奏者番となり、同日から寺社奉行を兼帯する（同14年2月22日まで）</p> <p>◆ この年まで凶作が続く</p> <p>◆ 12月、領分往還筋・在々通り筋の茶屋商売の者、冥加銀献上・鑑札下付と取り締まりを願い出る</p>	<p>越後米</p> <p>養蚕</p> <p>寺社奉行</p> <p>凶作</p> <p>茶屋商売</p>
1839	10	<p>◆ 松代・松本・上田 3 藩の分担調整により「天保の国絵図」ができる</p> <p>◆ 2月25日、原町、市神社再建願いを出す</p> <p>◆ 6月18日、原町の島田万助、京都越後屋喜右衛門へ売った生糸28捆の代金1100両を為替手形で決済する。このころ為替手形の信用取引が一般化する</p>	<p>天保国絵図</p> <p>市神社</p> <p>為替手形</p>
1840	11	<p>◆ 当亥年から 10 年間（申年まで）、駄賃人足賃が寛政 2 年の 3 割増しとなる</p> <p>◆ 4月、藩、夜間外出禁止の旅人に品物を売る「夜商売」を取り締まる</p> <p>◆ 藩、再び他所職人の領内入り込みを禁止し、さらに11月長屋新建を停止する（嘉永元年条件をつけて長屋新建を許可する）</p>	<p>駄賃人足賃</p> <p>夜商売</p> <p>長屋</p>
1841	12	<p>◆ 舞田村の中村弥七郎、『天保蚕秘養蚕重宝記』を著す（翌12年には上塩尻村の藤本善右衛門が『蚕かひの学』の養蚕技術書を、弘化 4 年上塩尻村の清水金左衛門が『養蚕教弘録』を著す）</p> <p>◆ 生糸の産出が多くなり上田に糸市が立つ。藩、生糸市場心得を通達する</p> <p>◆ 5月、仁古田村の紙屋仁右衛門、家に入った盗人が江戸で捕まり盗品が出る。幕府役人が松代旅宿で、望みなら品物を江戸奉行所へ持ちに来るよう申し渡すが、仁右衛門、取り捨てる処分を願う</p>	<p>養蚕書</p> <p>糸市</p> <p>盗品</p>
1842	13	<p>◆ 11月、肴類すべて肴問屋を経て小売店へ売渡す。寛政元年からの肴問屋制度に小売店側が反対し、買い占め反対の口上書を提出する</p> <p>◆ 中吉田村の吉田池、天保 4 年に普請をはじめ、この年出来る</p> <p>◆ 浦野の東昌寺鐘楼を、この年、立川流大工宮坂常蔵が建てる</p> <p>◆ 2月、上田宿の旅籠代、上248文・中200文・下172文で弁当代は別途に16文であった</p> <p>◆ 3月、藩、蚕種鑑札制度を再開し、取り締まり規定書を作成する</p> <p>◆ 6月、藩、質素儉約令および諸商売制度書を提示し、米価に応じた諸物価の引き下げの触を出す。諸商人請書を提出する</p> <p>◆ 原町・柳町は、年玉・雛内裏人形・恵比寿講などの「町内取極」をつくり、質素儉約に取り組む</p>	<p>肴問屋</p> <p>吉田池</p> <p>東昌寺鐘楼</p> <p>旅籠代</p> <p>蚕種鑑札</p> <p>儉約令</p> <p>町内取極</p>
1843	14	<p>◆ 7月、上田領内の日雇銭を申告する（春 4 月半から土用明けまでと秋土用から秋休みまでは200文・他の季節は150文）</p> <p>◆ 集中豪雨により蛭沢川、矢出沢川洪水で、柳町床上浸水などの被害甚大</p> <p>◆ 上塩尻村、この年から安政 4 年まで信友講（無尽講）を結成し、子孫永続と凶作の備えのために 1 口金 2 分として春と冬の 2 度積み立てる（その外、上田町、田中組などに永続講が結成されるようになる）</p>	<p>日雇銭</p> <p>水害</p> <p>信友講</p>
1844	15	<p>◆ 3月、江戸相撲浦風林右衛門、金剛寺村鎮守へ相撲太鼓櫓を奉納する</p> <p>◆ 3月12日、伊勢山村で火災が発生し、28戸焼失する</p> <p>◆ 8月、家老藤井三郎左衛門、藩の借財取り片付けを命じられる</p> <p>◆ 2月、御所村の田子氏読書と臨池（習字・書道を指す）門人を記録する（読書10人、臨池23人、追記23人）</p>	<p>相撲</p> <p>伊勢山火災</p> <p>藩借財</p> <p>寺子屋門人</p>
弘化元 (12/2)		<p>◆ 5月、産物改所を大手前に新築移転する（天保 4 年以後の両問屋から）</p> <p>◆ 7月、上田城下町在分の居宅商いの区域を定める</p> <p>◆ 12月28日、松平忠優、奏者番に再任され、即日寺社奉行兼帯となる</p>	<p>産物改所</p> <p>居宅商い</p> <p>寺社奉行</p>

執筆者・解説者紹介

古文書学習会「山なみ」

講師 尾崎 行也

会長 宮島かつ子

池田 達男

岩下 幸枝

岡安 操子

木内 文子

工藤 強

栗木 睦子

黒岩 弘

神津 定代

小林 容子

小林 佳枝

小山 一夫

小山 和宏

小山ますみ

塩沢 展子

関 弘子

寺島よしえ

中澤 啓子

平井 芳江

松山志津江

三井 紀子

柳澤 淑子

《年表》天保期の上田

西 暦	和 暦	記 事	分 類
1830	文政13	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 4月、松平忠優、藩主に就任する ◆ 上州、小諸から海野町・原町太物商組合へ木綿尺幅の統一を申し出る ◆ 町方奉公人の需要増加に伴い、長屋の建設が増え、問題がも起こってきたため、藩は長屋の新建停止命令を出す ◆ 11月29日、原町の井筒屋宗兵衛、瀬戸物店を開店する ◆ この年、大原幽学(33歳)、江戸へ上る途次1年間上田に滞在し、原町の商人に神・儒・仏融合の学を教える 	忠優家督 木綿尺幅 長屋 瀬戸物 大原幽学
1831	天保元 (12/10)	<ul style="list-style-type: none"> ◆ この年、手塚村の不動池(新池)新築なる ◆ 7月、原町島田万助、原町の肴問屋2軒の内1軒閉店のため、問屋渡世を願い出る ◆ 9月、藩主松平忠優、初めて上田へ入部する ◆ 上塩尻村の蚕種商人66人は冥加永(銭)の上納を藩に願い出る 	不動池 肴問屋 忠優入部 冥加銭 助郷免除
1832	2	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 11月、塩尻組、道中奉行から助郷免除の「御付札」をもらう ◆ 2月、藩、「他所職人取扱方心得之覚」と「他所職人制度書」をつくり、他所職人領内入り込みを許可する。それに伴い、同4年5月長屋の新建が解禁となる ◆ 5月13日、忠優、武石村等極度に困窮のため幕府へ中山道和田・長窪宿への助郷免除を家臣山本吉次郎名義で願い出る 	他所職人 長屋 武石助郷
1833	3	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 7月、21条の「諸職人制度書」を作事方がつくり、大工・木挽・畳師・屋根師・左官・桶師・瓦師・石工それぞれの冥加金上納を定め、鑑札を渡し切りにする ◆ この年、藩、再び検見取りをする ◆ 2月、諸職人世話役を置き、10か条の「世話役制度書」がつくられる ◆ 2月6日、藩、産物改所(後、改め会所)を両問屋に設置する。同5年4月1日から領内産の絹・紬・生糸の品質検査をし、改料を徴収する ◆ 2月6日、藩、領民に許可する帯刀御免の城内・城外・他所の範囲を変更する ◆ 5月、藩、油絞りのための菜種を田畑へ勝手に作ることを認め、1か村に3、4升ずつの種を渡す ◆ 8月、天候不順で不作のため上田町内37人から出金させ、町内困窮の者を定め、藩の救米と一緒に御救米を分ける。困窮の度により上中下三部に分けて率を別にして救米する ◆ 冷害に大風が加わり、上田領の損耗5万1000石余の凶作となる。その後、同9年まで続く天保の飢饉が始まる ◆ 9月、凶作につき酒造・他所酒買入停止の触が出る ◆ 11月、上州吾妻郡12か村、洗馬組割元へ上田領払米の売渡しを願い出る。上田領では他領に出穀を禁止する 	職人冥加金 検見取 世話役 産物改所 帯刀御免 菜種 御救米 天保の飢饉
1834	4	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 12月1日、富山領の売薬商人ら38人、冥加銀一人年分銀10匁を上納し、鑑札を受ける ◆ この年、和田宿付定助郷の御嶽堂村が、免除嘆願の差村として小泉・塩田組の29か村を指定する 同9年、幕府は御嶽堂村の代助郷を塩田組の8か村に命じる ◆ 5月22日、紺屋株の売買・賃借を自由とする ◆ 5月26日、藩、菓子職の世話役を設け、冥加銀を差し出させ、鑑札を渡す ◆ 5月、藩、繭巢穀・真綿売買を取り締まり、鑑札を渡し、料銀を課す ◆ 上田領分町在ともに疫病流行する(同8年にも流行し、藩では他領よりの寄留者にいたるまで、罹病者に薬を施与する) 	富山薬売 差村 代助郷 紺屋株 菓子職人 巢穀真綿 疫病
1835	5	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 12月、海野町・原町問屋、産物改料140両余を上納する ◆ 1月26日、文政12年より起こった町年寄と村庄屋の席順争いについて、藩、勤功ある町年寄に格式を与え割番格並とすることで解決する ◆ 1月、年来の種繭の仕入方は籠入れを買入れたが、繭量不同のため目方買いとし、1両につき何貫と変更する。 ◆ 昨年10月ころより2月ころまで雨なく、7月大雨風、8月霜・冷害により上田領の損耗3万石余に及ぶ 	産物改料 席順争 種繭 冷害
1836	6	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 1月、藩、江戸・上田の当暮より来年中費用出入の積帳書き上げる。収入金1万3874両1歩2朱、支出金5万7595両1歩・銀42匁2分5厘、不足金4万3720両3歩2朱・銀42匁2分5厘 ◆ 2月、上塩尻村で、上田領内の蚕種の生産量を取り調べる(含半取) ◆ 8月25日、上田領稲荷山で凶作による米価高騰、生活の困窮などを不服として騒動が起こる。6人捕らえられる ◆ 8月、髪結いの本格的な取り締まりを進めるため、鑑札制度を取り入れる 	藩費用 蚕種生産 騒動 髪結

天保飢饉の上田

発行日 平成十九年十一月一日

編集 古文書学習会「山なみ」・上田市立上田図書館
発行 上田市立上田図書館

上田市材木町一―二―四七
電話 〇二六八―二二―〇八八〇

印刷 一喜堂印刷

上田市塩川六三〇―三〇
電話 〇二六八―三五―二六二四

32	19	9	8	8	7	4	4	ページ
上	下	下	下	下	下	上	上	上段・下段・図
17	4	1	21～26	13	1	14	13	行
季気候順次●	菜	左図参照●●	穀● (五ヶ所あり)	徴集●	上田市上田博物館●●	鍛冶町●	件●	誤
季候順次	草	図2参照○○	穀○	徴収○	上田市立博物館○○	鍛冶町○	軒○	正

		47	43	43	40	34	33	ページ
			下	上	上	上	上	上段・下段・図
		3	2	13	14	14	13	行
		問題がも起●	弘化四末三月●	私領領土●	精力井尽きて●	盗み捕り●	救米遣●	誤
		問題が起	弘化四末三月○	私領領主○	精力尽きて	盗み取り○	救米遣○	正